

「南方隨筆」版

南方熊楠

「龍燈に就て」

藪野直史オリジナル注附

「やぶちゃん注」本論考は大正四（一九一五）年九月・十月・十一月（本文）及び翌五年一月（補遺）と十二月（追記）発行の『郷土研究』初出で、大正一五（一九二六）年五月に岡書院から刊行された単行本「南方隨筆」に収録された。

底本は同書初版本を国立国会図書館デジタルコレクションの原本画像（[ここ](#)が冒頭）で視認して用いた。

但し、加工データとして[サイト「私設万葉文庫」](#)にある電子テキスト（底本は平凡社「南方熊楠全集」第二巻（南方閑話・南方隨筆・続南方隨筆）一九七一年刊で新字新仮名）を加工データとして使用させて戴くこととした。ここに御礼申し上げます。

疑問箇所は所持する平凡社「南方熊楠選集3」の「南方隨筆」（新字新仮名）で校合した。同選集は本篇の初出の誤りが補正してあり、しかも原文はなく、元版全集編者による読み下し文となっている（しかし、それは現代仮名遣の気持ちの悪い代物であり、無論、漢字は新字体である）。今までもそうしてきたが、底本の原文通り、まず、白文で示し、その後「[《》](#)」で推定される訓読文を添えた（そこでは大いにルビを振った）。但し、私は可能な限り、引用原本を確認出来るものは、それで確認して誤りと判断し得たものは訂し、「選集」のみが拠り所となる場合でも、無批判の受け入れず、読みも私の我流で訓読し直してある。そうした部分は、実は甚だしく多くあるから、五月蠅くなるばかりなので、通常、その底本の誤りは、原則、注記しない。

さらに、南方熊楠本人の使用語・表現もかなり難読で、仏語に到っては私も見たことがない漢語もかなり多い。されば、今までのように注で示したのでは、読み難くなるばかりか、只管に煩瑣となるだけで、百害一利に等しくなってしまう。そこで全篇を通じて、読みが難読であったり、振れそうなものは、私の推定で歴史的仮名遣で（[（）](#)）で括弧してルビ化した。但し、ブログ版（[カテゴリ「南方熊楠」](#)で三分割）ではやたらに附したが、こちらでは、禁欲的に削った。若し、読みに不安があれば、ブログ版を参照されたい。そちらに読みを振ってあるかも知れない。なお、本篇は流石に熊楠も底本編者も考えたらしく、ルビがそれでも振られている割合が本書中の多篇に比しても、有意にある。なお、それらは区別して、[実際のルビ](#)で指す。

さらに、熊楠の文は思うところ自在無礙で、一つの段落が異様に長く、そのままでは注を附しても甚だ読み難いものとなるため、「選集」を参考に段落を細かく入れ、そこに注を挟んだ。注の後は一行空けた。なお、私が十全に知っているものや、その反対に、私に出来たとしても生没年ぐらいいしか附せない人物や、よく判らない書名で本文内で重要対象と認められないと判断したものには注を附さなかった。悪しからず。二〇二二年四月十六公開。」

## 龍燈に就て

一

尾芝君の龍燈(りゆうとうのまつ)、松傳説に、「龍燈と云ふ漢語は、もと水邊の怪火を意味して居る。日本  
でならば筑紫の不知火、河内の姥(うば)が火等に該當する」とあるが（郷研究三卷四號二〇六  
頁）、果たして左様な意味の龍燈てふ漢語ありや。類聚名物考卷三三八に、「龍燈の事古書  
にも和漢共に見當たらず、似たる事はあり。中山傳信錄に天妃靈應記の事をいふ内に、康  
熙四年、昇化於涇州嶼、時顯靈應、或示夢、或示神燈、漁舟獲庇無數。《康熙四年、  
涇州嶼に昇化す。時に靈應を顯はす。或いは夢に示し、或いは神燈に示す。漁舟の庇りを  
獲ること、無數なり。》。光武、暗夜火光を見、皇朝不知火の類も似たれども、龍燈の名は  
曾て見えず」とあるが是も間違で、佩文韻府二五を見ると、夏竦上元應制詩、寶坊月皎龍  
燈淡、紫館、風微鶴平焰《夏竦が「上元應制」の詩に「寶坊 月 皎かうにして 龍燈 淡し  
／ 紫館 風 微かにして 鶴焰 平らかなり。》と有る。其全詩を知らぬから何の事か  
判らぬが、兎に角古書に龍燈の字が無いと言はれぬ。又佛名經や諸佛世尊如來菩薩尊者  
名稱歌曲などにも龍燈の字が有つたと記憶するが、今座右に無いから仕方が無い。  
「やぶちゃん注…太字は底本では傍点「。」。

「龍燈」「龍燈松伝説」「諸國里人談卷之三 橋立龍」の私の注などを参照されたい。  
「尾芝君」ブログ公開当初、「不詳」とのみ注していたが、長年、私の記事を丹念に読ま  
れ、情報を提供して下さるT氏からブログでの公開後、メールを頂戴し、『尾芝君』は尾  
芝古樟で、柳田國男が『郷土研究』発行時代に使った変名です。柳田の『故郷七十年』項  
目「匿名のこと」に尾芝古樟を含め色々な変名が書かれています。』とあって、「青空文庫」  
の「故郷七十年」（同作品は昭和三二（一九五七）年に神戸新聞社が翌年の創立六十周年  
を迎えるに当たって、兵庫県出身で当時八十二歳であった柳田國男に回顧談を求め、柳田  
はこれを快諾し、全二十五回に亙って聞き書きが行われ、二百回に亙る連載記事となつた  
ものであるが、これは聞き書きであるからか、「ちくま文庫」版全集には載らない（その  
後の一九九七年刊の新しい「柳田國男全集」第二十一巻に載っているようである）を紹介  
して下さった（こちら）。その「匿名のこと」の章で、柳田は『私の匿名の一つに尾芝  
古樟こしょうというのがある。これは北条の母』（柳田國男の実母）『の実家の姓と、同家にあつた  
古い樟くすの老樹にあやかつたものである。思えば私にはこうした匿名が二十近くもある。』  
と述べていた。私はこの「青空文庫」の記事は数年前に発見したものの、全篇を読んでい  
いながつたため、気づかなかつた。さらにT氏は『熊楠が「尾芝君の……」で引用してい  
る文章は『神樹篇』の龍燈松傳説（大正四年六月、郷土研究三卷四號）です』とのことで  
あつた。同評論は国立国会図書館デジタルコレクションの実業之日本社版「柳田國男先生

著作集」中に正規表現のものを発見したので、[急遽、電子化し、こちらに公開した](#)。T氏に心より御礼申し上げる。なお、熊楠はそれに触発されて本論を書いているのであるからして、[そちらをまず読みたい](#)。

「不知火」「諸國里人談卷之三 不知火」を参照。

「姥が火」[「古今百物語評判卷之四 第九 舟幽靈附丹波の姥が火、津國仁光坊事」](#)の本  
文及び私の注（及びそこにリンクした私の過去の別記事）を参照。

「類聚名物考」は江戸中期の類書（百科事典）で全三百四十二卷（標題十八卷・目録一卷）。幕臣で儒者であった山岡浚明（享保一一（一七二六）年～安永九（一七八〇）年…号は明阿。賀茂真淵門下の国学者で、「泥朗子」の名で洒落本「[跣婦人伝](#)」を書き、「逸著聞集」を著わしている）著。成立年は未詳で、明治三六（一九〇三）年から翌々年にかけて全七冊の活版本として刊行された。国立国会図書館デジタルコレクションの画像で同刊本を視認したところ、[ここに発見した](#)（巻三百三十八の「雑部十三」の「靈鬼 妖怪」の内の「龍燈」の一節である。引用部は次のページにあるので、見られたい。「筑紫の不知火」を熊楠が出したのも、ここを見てのことであろう。末尾を見られたい。

「中山傳信録」清の徐葆光が一七二一年に著した琉球地誌。全六卷。[早稲田大学図書館「古典総合データベース」のこちらの第一巻のここ](#)（PDF一括版）の37コマ目以下に琉球へ渡る経路を語る文脈の中で「天妃靈應記」が載る（前のコマに天妃の絵が載る）。訓点付きなので読み易い。

「康熙四年」清代。一六六五年。

「湄州嶼」現在の福建省莆田市湄州島。[ここ](#)（グーグル・マップ・データ。以下同じ）。

「光武」後漢王朝の初代皇帝光武帝劉秀（紀元前六年～紀元後五七年）。

「佩文韻府」清代の蔡升元らが康熙帝の勅を奉じて編纂した韻書。百六卷。補遺である汪灝ら撰の「韻府拾遺」百六卷と合わせて用いられる。前者が一七一一年に、後者が一七二〇年に成った。内容は経・史・子・集の四部の書物から、二字から四字の語彙を集めて、末尾の字の韻母によって平水韻の百六韻に分類排列し、さらに、その語彙の出典を注記したものの。「佩文」とは康熙帝の書齋名。

「佛名經」元魏の菩提流支訳。全十二卷。懺悔滅罪のために三世十方の諸仏の名号を受持することを説く。但し他にも「仏名經」と題する経典は多いので、これを指しているかどうかは不詳。

「諸佛世尊如來菩薩尊者名稱歌曲」明代の一四一七年序のある「大藏經」に所収される仏典の一つ。

五雜俎九に、「又云龍火與人火相反、得濕則燄、得水則燔、惟以火投之則反熄、此亦不知其信否也」《又、云はく、「龍火、人火と相ひ反し、濕を得れば、則ち、燄え、水を得れば、則ち、燔く。惟、火を以つて、之れに投ずれば、則ち、反つて熄ゆ。」と。此れ、又、其の信か否かを知らず。》この龍火（龍燈と言はず）は水邊の怪火らしいが、本草網目に

火を分類して天火四、人火三、地火五、共に十二とす。天火四とは太陽の眞火星精の飛火、此の二つが天の陽火で、龍火と雷火、此の二つが天の陰火と有つて、龍火を天のものとし居るから考ふると、本草に所謂龍火は水邊の怪火よりも、主として高く空中に現ずる歐洲で所謂エルモ尊者の火や日本で呼ぶ龍燈を指したらしく、乃(すなは)ち水濕の地の燐一名鬼火と別(わかち)て、高空中の怪火を龍火と云つたらしく、綱目に、人の陰火二(命門の相火、三味の火)地の陰火二(石油の火、水中の火)、龍火はこれらに隸(つ)たものと見立てたのだらう。果たして然らば、高空中に現ずる怪火を龍燈と云ふは、龍火と同源若くは其より出た名で、尾芝君が五山の學僧の倭製の如く謂はれたは誤見かと(おぼ)惟(おも)ふ。

「やぶちゃん注」・「五雜俎」・「五雜俎」とも表記する。明の謝肇淛(しゃちやうせき)が撰した歴史考証を含む隨筆。全十六卷(天部二卷・地部二卷・人部四卷・物部四卷・事部四卷)。書名は元は古い樂府題で、それに「各種の彩(いろどり)を以つて布を織る」という自在な対象と考証の比喩の意を掛けた。主たる部分は筆者の読書の心得であるが、国事や歴史の考証も多く含む。一六一六年に刻本されたが、本文で、遼東の女真が、後日、明の災いになるであろうという見解を記していたため、清代になって中国では閲覧が禁じられてしまい、中華民国になってやっと復刻されて一般に読まれるようになるという数奇な経緯を持つ。ここに出るのは、卷九の「物部一」にある以下の一節。前の部分も引いておく。

\*  
俗有立夏分龍之說、蓋龍於是時始分界而行雨、各有區域、不能相渝、故有咫尺之間而晴雨頓殊者、龍爲之也。又云、「龍火與人火相反、得濕則焰、得水則燔。惟以火投之、則反熄。」此亦不知其信否也。

\*  
なお、「燄」は「焰」の異体字。

「本草綱目に火を分類して……」明の李時珍「本草綱目」卷六の「火」の部の冒頭にある「陽火陰火」での分類。「漢籍リポジトリ」のこちらの頭を参照されたい。訓点がない読めないと仰せなら、[国立国会図書館デジタルコレクションの寛文九（一六六九）年の訓点付き](#)がある。

「エルモ尊者の火」悪天候時などに船のマストの先端が発光する現象を言う「セントエルモの火」(St. Elmo's fire)。当該ウイキによれば、その『名は、船乗りの守護聖人である聖エルモ (エラスムス)』(Erasmus ? (三〇三年頃)』に由来する。彼はイタリアに向かう船に乗船中、嵐に見舞われ、船は転覆の危険にさらされる。聖人が熱心に神に祈ると、嵐はおさまる。そして帆柱の先端に青い炎が踊り出した、と伝えられている』ことに基づく。物理学的には、『尖った物体の先端で静電気などがコロナ放電を発生させ、青白い発光現象を引き起こす』すと説明され、『先端が負極の場合と正極の場合とは、形状が異なる。雷による強い電界が船のマストの先端 (檣頭) を発光させたり、飛行船に溜まった静電気でも起こることがある。放電による「シュー」という音を伴う場合がある』とある。また、一七五〇年に『ベンジャミン・フランクリンが、この現象と同じように、雷の嵐の際に先

のどがった鉄棒の先端が発光することを明らかにした』ともある。

「本草に所謂龍火は……」ここでの「本草」は、「本草綱目」を始めとして広義の漢籍の本草書の謂いであろう。無論、後の「綱目」は「本草綱目」を指す。

「尾芝君が五山の學僧の倭製の如く謂はれた」『尾芝古樟（柳田國男）「龍燈松傳說」を参照されたい。』

橘南谿の東遊記後編二に、大徹禪師、越中の眼目山を開いた時、山神龍神助力して色々奇特有り。今も毎七月十三夜其庭の松の梢に燈火二つ留まる。一は立山の巔より、一は海中より飛來たる。これを山燈龍燈と云て此邊の人例年見る。世に海中より龍燈出ずる事多きも、此等の如く山燈龍燈一度に來るは稀有じぢやと載す。大徹の師永平寺の開祖道元は宋に遊んだ人だから、其頃支那で山に出るこの類の火を山燈、海より現ざるを龍燈と云ふこと、丁度蜃氣樓が山又海に顯はるゝに隨て山市又海市と呼んだ如くだつたのかと惟ふ。土佐の蹉跎明神にも同時に山燈龍燈出で、伊勢安濃津邊にも山上より火出で、塔世浦より來たる火と鬪ふて後、一つは山の方へ、一つは沖の方へ飛び去るといふ（諸國里人談三）。淵鑑類函三六〇に孔帖を引いて、于頤爲襄陽、點山燈《于頤、襄陽を爲めしとき、山燈を點す》。是は人民便利の爲山上に燈臺を設けたのか、若くは京都東山の大字の様に火を點したのを山燈と呼んだらしいが、明の陸應陽の廣輿記一六に、「山燈、蓬州現凡五處、初不過三四點、漸至數十、在蓬山者最異、土人呼爲聖燈」《山燈、蓬州に現はること、凡そ五處なり。初めは三、四點に過ぎず、漸に數十に至る。蓬山に在る者最も異なり。土人、呼んで「聖燈」と爲す》と載せたは、疑ひ無く、越中眼目山の山燈同様の火で、最初は山から出ずるを山燈、海より來たるを龍燈と眼目山同様支那で言つたのが、日本に傳はりて後山燈では山の燈火と聞えて一向神異は無いから、之を神異にする念より専ら龍燈とのみ呼ぶ風と成たのであらう。

「やぶちゃん注…「橘南谿の東遊記後編二に、大徹禪師、越中の眼目山を開いた時、……」  
醫師であつたが著述家としても知られた橘南谿（宝曆三（一七五三）年〜文化二（一八〇五）年）。本名は宮川春暉。伊勢久居（現在の三重県津市久居西鷹跡町に久居藤堂藩に勤仕する宮川氏（二百五十石）の五男として生まれた。明和八（一七七二）年一九歳の時、医学を志して京都に上り、天明六（一七八六）年には内膳司（天皇の食事を調達する役所）の史生となり、翌年には正七位下・石見介に任ぜられ、光格天皇の大嘗祭にも連なつて医師として大成した。一方で諸国遍歴を好み、また、文もよくしたため、夥しい専門の医学書以外にも、この「東遊記」や「西遊記」（併せて「東西遊記」と称する）等の紀行類や名隨筆「北窓瑣談」等で知られる。早稲田大学図書館「古典総合データベース」のこちらで原版本が見られる（PDF一括版。当該部は2コマ目から）。それを視認して示す。句読点等を打ち、読みの一部は私が歴史的仮名遣で推定追加・修正した。

龍燈

南谿子著

越中新川郡に眼目山といへる寺あり。「眼目山」と書て「サツクワ山」と讀む。わけは知らず。宗旨は禪にして道元禪師の弟子大徹禪師の開基なり。此大徹禪師、此山を開かれし時、山神・龍神、助力して、色々の奇特ありしよし。今に至り、毎年七月十三日の夜は、眼目山の庭の松の梢に、燈火、のぼる。一ツは立山の絶頂より飛來り、一ツは海中より飛來り、皆、松の梢にとどまる。是を「山燈」「龍燈」といひて、此あたりの人は例年の事也。世に龍燈とて、海中より、火の出づるは多けれども、此寺のごとく、山燈・龍燈、忝度に來りて、松の梢に留るは、希有の事なりといふ。越前の敦賀常宮にも「龍燈の松」とて、例年正月元日の夜、かゝる事あるを、其あたりの人は、皆、見る事たり。

\*

この寺は曹洞宗の名刹として知られ、現行では眼目山立山寺と讀む。但し、地元では確かに「さつかの寺」とも呼ばれている。建徳元（一三七〇）年に立山権現が樵の姿となつて大徹宗令禪師（大本山総持寺第二祖峨山禪師の高弟で宗門五派の随一とされる僧であつた）を導き、寺院の建立をすすめたと伝えられている。因みに、「**眼目**」をネットで自動翻訳すると、中国語で「薩卡」と表示された。これが元か。なお、「敦賀常宮」は現在の常宮（じようぐう）神社（グーグル・マップ・データ）。

「土佐の蹉跎明神」「諸國人談卷之三 蹉跎龍燈」の本文と私の注を参照されたい。地図もリンクさせてある。

「伊勢安濃津邊にも山上より火出で、……」私の「諸國人談卷之三 分部火」の本文と私の注を参照。地図もリンクさせてある。

「淵鑑類函」清の康熙帝の勅により張英・王士禎らが完成した類書（百科事典）。一七一〇年成立。「夷堅志」は南宋の洪邁（一一二三年～一二〇二年）が編纂した志怪小説集。一一九八年頃成立。二百六卷。同文字列は確認出来たが、引用元「孔帖」というのは如何なる書物か不明。

「明の陸應陽の廣輿記」清の康熙帝の時に陸応陽らによって書かれた中国とその周辺国の地誌。

「蓬州」南北朝時代から民国初年にかけて、現在の四川省南充市（グーグル・マップ・データ）一帯に設置された旧州名。』

但し、支那の山嶽又廣い内地一向海無い處にも龍は棲むと信ぜられたから、（例せば慈覺大師入唐求法巡禮行記二に、老俗等云、古來相傳、此山多有龍宮《老俗等云はく、「古來、相ひ傳ふ、『此の山に、多く、龍宮、有り。』と。》、山燈を龍燈と呼ぶ事古くより彼國に在つたのかも惟ふ。現に一八九六年板ヨングハズバンド大尉の大陸之心臟（Capt. Youngusband, The Heart of a Continent）三〇二頁に、支那トルキスタンのランクル湖邊でチラグ、タシユ（燈巖の義）を見る。其巔に不斷燃居る燈ありて、龍の眼より出る光とも、龍の頭上の寶珠より生ずる光とも云ふ。著者往きて仰ぎ視るに、洞の天井に弱

い白光有つて燐光の如し。依つて苦辛して徒者と俱に巖を登り見れば、洞と思ひしは實は巖頂を横貫した孔あなで、他方より通る日光が孔の天井に著いた白い堆積層に反射して白く光る。其を數百年來事々しく不斷燈の窟くわと傳唱したのだと有つて、特に龍燈の號なは擧ぬが、龍の眼や珠から出る燈と云ふ所を見ると、龍燈の種類・起因は種々異なりとするも、龍が燈火を出すと云ふ迷信は日本で始まつたのでも日本ばかりに存する者でも無く、どうもアジア大陸から傳來の者らしい見える。兎に角越中で山燈龍燈を併稱する、其山燈が支那の書に見え居る上、龍より生ずる燈の話が支那の領地に在る上は、龍燈ちふ稱は吾邦五山の僧などの手製で無く、全く山燈と等しく支那傳來と定めて大過無かるべしだ。猶大清一統志など片端から調べたら斯かむる火を呼んだ龍燈なる名が支那に在つた例も有るだらうと、著手はしたが事多くて一寸濟まぬ。

「やぶちゃん注…「慈覺大師」最後の遣唐使僧で、最澄に師事し、後に第三代天台座主となつた円仁(延暦一三(七九四)年〜貞觀六(八六四)年)。

「入唐求法巡禮行記」円仁が承和五(八三八)年に博多津を出港した場面から始まり、揚州へ向かい、承和十四年に帰国するまでを日記式の文体で書いた旅行記。当該部は、

\*

開成四年「やぶちゃん注…八三九年。承和六年相当。」九月三日 日本國僧圓仁等帖  
十二日午時。雲雷雹雨。五更之後。龍相鬪鳴。雹雨交下。電光紛耀。數尅不息。到曉便止。朝出見之。氷電流積三四寸許。凝積如雪。老僧等云。古來相傳。此山多有龍宮。

\*

である。引用は[中文サイト「CBETA 漢文大藏經」](#)のこちらに拠つた。

「一八九六年板ヤングハズバンド大尉の大陸之心臓 (Capt. Younghusband, "The Heart of a Continent") 三〇二頁」イギリスの軍人で探検家のフランシス・エドワード・ヤングハズバンド (Francis Edward Younghusband 一八六三年〜一九四二年…インドのマリー生まれ。軍人として一八八二年にインドに赴任し、一八八六から一八八八年にかけて、満州・モンゴルなどを踏査する。以降、英国のインド経営の辺境への拡大に功績を上げた。一九〇三年から翌年にかけてチベットに侵入・征圧し、「ラサ条約」を締結した。英国エベレスト登山の推進役も務めた。帰国後、「王立地理学会」会長・「エベレスト委員会」議長等を歴任した) が、一八八六年に踏破した北京・満州・ゴビ砂漠・トルキスタン・ヤルカンド・ヒマラヤ等の探検記。「カラコラムを越えて」という邦訳題で知られる。[[Internet archive](#)]  
**で当該年版の原本が読めるが、熊楠が言っているページ数の前ページからそれが当該ページにかけて記されている。」**

古印度に龍燈しゆてふ名の有無は知ぬが燈が龍の居る上の樹に懸る話はある(後文を見よ)。釋迦方誌卷中に、尼波羅國こはろこくの熱水池底の慈氏佛の冠を火龍が護る事有るが、火龍は小説西遊記等にも見え火を吐き物を焼散やます龍りゆうで龍火とは別だ。神僧傳四に、劉宋の竺道生吳の虎丘山に講經した時、雷震青園佛殿、龍昇于天、光影西壁、因改寺名曰龍光《雷、青園の



佛殿に震ふるひ、龍、天に昇る。光、西壁に影ず。因つて寺名を改め、「龍光」と曰ふ。』と見ゆ。宗鏡録九七に、燈と光と二名有れども其體別ならず、即ち燈是れ光、光是れ燈と有るが、爰の龍光は落雷の閃光が寺壁に映つたので龍燈ではない。又佛祖統記四、唐の代宗、「於大明宮建道場、感佛光現、諸王公主近侍諸臣竝視光相、自子夜至鷄鳴」《大明宮に於いて道場を建て、佛光の現ずるを感ず。諸王・公主・近侍の諸臣、竝びに光相を視る。子夜「やぶちゃん注…子の刻。真夜中。」より鷄鳴に至る。》。又憲宗佛骨を禁中に迎え入れた時の記に、「初舍利入大内、夜放光明、早朝群臣皆賀曰、聖德所感、韓愈獨不言、上、問愈、愈曰、微臣曾見佛經、佛光是非青黃赤白等相、此是龍神衛護光云々」《初め、舍利、大内に入るや、夜、光明を放つ。早朝、群臣、皆、賀して曰はく、「聖徳の感ずる所なり。」と。韓愈、獨り、言はず。上、愈に問ふ。愈、曰はく、「微臣、曾つて佛經を見るに、『佛の光は青・黄・赤・白等の相非ず。』と。此れは是れ、龍神衛護の光なり」云々》。此所謂佛光は僧輩が方術もて佛舍利から夜分光明出る様見せたらしい。其を韓愈は眞の佛光とは信ぜなんだが、舍利を衛護する龍の體から出る光と信じたので、先は人造の龍燈だ。其から韻府拾遺二五に、「拾遺記、海人乘霞舟、以雕囊、盛數升龍膏、獻燕昭王。王坐通雲臺、然龍膏爲燈火、光曜日、烟色如丹」《拾遺記》に、『海人、霞舟に乗り、雕囊を以つて數升の龍膏を盛り、燕の昭王に獻ず。王、通雲臺に坐し、龍膏を然やし、燈火と爲す。光、日に曜き、烟の色は丹のごとし。』と。》。此龍膏燈は何か鯨族の油膏を燈に用ひたのを誇張した譚だらう。字が龍燈と混れ易いから記し置く。さて予が知り得た所、本邦で専ら龍燈と呼ぶ者の異名を列ねて見やう。

「やぶちゃん注…「古印度」底本では不自然に字空けがある（右ページ後ろから二行目。活字落ちと判る）ので、「選集」で「古」を補った。」

「釋迦方誌」「釈迦方志」とも。唐代の高僧道宣（五九六年～六六七年）によって編纂された「封疆篇」・「統撰篇」・「中辺篇」・「遺迹篇」・「游履篇」・「通局篇」・「時住篇」・「教相篇」の八つの篇に分け、仏祖釈迦牟尼の誕生地や、教説流布地などを記述した仏教史跡地誌であり、その内容は、西域、特にインドの地理環境や中インドの交通ルートや經由国、西行求法の人物、仏教の中国伝来に関する史実や伝説、歴代帝王の奉仏事績、各時代の寺院の数や僧尼の人数などの多岐に亘る。中国仏教研究に欠かせない典籍の一つ。

「尼波羅國」ネパールのこと。

「神僧傳」漢籍の仏教僧の伝記らしいが、成立も作者も不詳。

「劉宋」（四二〇年～四七九年）は中国の南北朝時代の南朝の国名。

「吳の虎丘山」[ここ](#)（グーグル・マップ・データ）。

「宗鏡録」（すぎょうろく）は中国五代十国時代の呉越から北宋初の僧の永明延寿が撰した仏教論書、全百卷。九六一年成立。[当該ウィキ](#)によれば、『撰者の永明延寿は、雪峰義存の弟子である翠巖令参のもとで出家し、天台徳韶の嗣法となった禅僧である。永明延寿の主著が、本書であり、禅をはじめとして、唯識宗・華嚴宗・天台宗の各宗派の主体となる著作より、その要文を抜粋しながら、各宗の学僧によって相互に質疑応答を展開させ、

最終的には「心宗」によってその統合をはかるという構成になっている」とある。

「佛祖統記」南宋の僧志磐が一二六九年に撰した仏教史書。全五十四卷。当該ウィキによれば、『天台宗を仏教の正統に据える立場から編纂され』たものとある。詳しくはそちらを見られたい。なお、引用の内、「諸王公主近侍諸臣竝視光相」の「竝」は「選集」では、「皆」となっているが、中文サイトその他を見るに、「並」となっており、採らない。

「子夜」午前零時前後。

「鷄鳴」午前二時頃。

「韻府拾遺」既注。「佩文韻府」を見よ。

「拾遺記」中国の伝承を集めた志怪小説。全十卷。作者は後秦（四世紀）の王嘉。三皇五帝から、西晋末の石虎の事績にまで及ぶが、原本は滅び、現在の「漢魏叢書」等に収められているものは、梁の蕭綺が再編したもの。内容は奇怪で淫乱な話柄が多く、総てが事実ではないとされる。第十卷は崑崙山・蓬萊山などの名山記となっている。王嘉は隴西安陽の出身で、容貌、醜く、滑稽を好んだが、崖に穴居したり、その言動は奇矯であった。後趙の石季竜（Ⅱ石虎…在位…三三五年～三四九年）の末年、長安に出て、終南山に隠棲したが、その予言はよく当たるとされ、前秦の苻堅が淮南で敗れることを予知したとされる。後秦の姚萇に召されたが、彼の機嫌を損ねたため、殺された（小学館「日本大百科全書」に拠った）。

（山燈）。上に述べた通り。

（天燈）。趙宋の范成大詩、「山頭一任天燈現」《山頭は 一へに天燈の現ずるに任す》、楊萬里詩、「澄泓無復現天燈」《澄泓として 復た 天燈の現ずること無し》（韻府廿五）。南宋末の劉壘が書いた隱居通議三十に神怪竊冥と題して、「廬阜天池、則見文珠天燈、西蜀峨眉、則見普賢天燈」《廬阜の天池には、則ち、文珠の天燈を見、西蜀の峨眉には、則ち、普賢の天燈を見る》。龍火と龍燈と同じきに反し、天火と天燈とは別だ。「人火曰天火曰災」《人火は火と曰ひ、天火は災と曰ふ》（淵鑑類函三五九、左傳を引く）。天火は人爲に出ず、天然に生ずる總ての火を云ふた名だらうが、主として天より落つる隕石の火を云うたらしく、即ち日本でも俗にテンピと呼ぶ。上に引いた本草綱目火の分類中所謂星精の飛火だ。異苑、「晋義熙十一年、京都火災大行、吳界尤甚。火防甚峻、猶自不絶。時王弘守吳郡、晝座廳視事、忽見天上有一赤物下、狀如信幡、遙集南人家屋、須臾火遂大發、弘知天爲災、故に不罪始火之家、識者知晋室微弱之象也」《晋の義熙十一年、京都、火災、大に行はれ、吳界、尤も甚だし。火防、甚だ峻しけれど、猶ほ自と絶えず。時に王弘、吳郡に守たり。晝、廳に坐して事を視るに、忽ち、天上より、一つの赤き物の下つる有るを見る。狀は信幡のごとし。遙かに南人の家屋に集まり、須臾にして、火、遂に、大いに發す。弘、天の災ひを爲すを知り、故に火を始めし家を罪せず。識る者、晋室の微弱となれる象と知れり。》（類聚名物考三三七、天火）。佩文韻府五〇に、史記孝景紀、三年長星出西方、天火燔雒陽東宮大殿城室。蜀志劉焉傳、劉焉爲益州刺史、志意漸盛、造作

乘輿車具千餘乘、後被天火燒城、車具蕩盡。竹書紀年、武王將伐紂、天火流下、應以告也云々。易林、天火大起、飛鳥驚駭《『史記』の「孝景紀」に、『三年、長星、西方に出でて、天火、雒陽の東宮・大殿・城室を燔く。』と。「蜀志」の「劉焉傳」に、『劉焉、益州の刺史と爲る。志意、漸盛んにして、乘輿の車具千餘乗を造作す。後、天火に城を焼かれ、車具、蕩盡す。』と。「竹書紀年」に、『武王、紂を伐たんとするや、天火、流れ下る。應じて以つて告ぐるものなり』云々。「易林」、「天火、大いに起こり、飛鳥、驚駭す。』と。』等の例を挙げたは、何れも奔星が飛び隕ちて火災を生じ若くは人畜を騒がせたのだ。東鏡一二に「建久三年四月三十日丑尅、若宮職掌紀藤太夫宅焼亡、不移他所、諸人走集之處、家主云、是非失火放火等之疑。偏存天火之由云々」《建久三年四月三十日丑の尅若宮の職掌紀藤太夫が宅、焼亡す。他所へ移らず。諸人、走り集まる處、家主云はく、「是れ、失火・放火等の疑ひに非ず。偏へに、天火の由を存ず。」と云々》。後文に據ると、翌日藤太夫狂亂して、實は或女を口説いたが、鶴が岡の宮に納むべき神鏡が自宅に在るを憚るとして聽入れぬ故、彼女の宅と思ひ放火したら自宅ぢやつたと自白したので、頼朝神威の嚴重なるに驚き鶴岡上下宮へ神馬二疋を獻じた、と有る。さて福本日南に曾て聞いたは、筑前の俗傳に隕星「やぶちちゃん注・隕石。」が落ちた人家はいたく衰えるか、きわめて繁昌するかだと云ふ、と。

「やぶちちゃん注」・「神怪窈冥」（しんかいようめい）現代仮名遣）人為を超えた不可思議なものは奥深くて測り知ることの出来ないことを言う。

「廬阜天池」現在の新疆ウイグル自治区昌吉回族自治州阜康市にある天池（天山天池・新疆天池とも呼ぶ）。ボゴダ山の北麓にある氷河湖で、西王母神話や宗教的でユニークな民族民俗・習慣で知られ、その景色は絶佳とされる。

『異苑、「晋義熙十一年、京都火災大行……」は底本に明らかに誤りが複数あることが素人の私にも感じられた。そこで「中國哲學書電子化計劃」の「異苑」の影印本の当該部で特異的に訂した。一々挙げないが、比較されたい。「異苑」は六朝の宋代の説話集。全十卷。劉敬叔撰。現存のテキストは明代に改編集されたもので、『津逮秘書』及び『學津討源』という二つの叢書に収録されているものが最もよく纏まっている。六朝時代に数多く著された志怪小説の一つで、当時の人物に関する怪奇な挿話や、民間に伝わる超自然的な説話から仏教説話にも互り、他の志怪物と比べ、かなり多彩である。著者劉敬叔は彭城（ほうじょう）県（現在の江蘇省）の人で、宋に仕え、文帝の時、拜謁・奏上の取次などを掌った給事黃門郎となり、泰始年間（四六五年〜四七一年）に病没したと伝えられる（小学館「日本大百科全書」に拠った）。私の非常に好きな作品である。本記事のブログでの公開後、先の「氏より、『熊楠は類書からの引用を正しく書いていますが、そのため、類書の間違いがそのまま反映されます。この「異苑」の一寸変なのは、「類聚名物考」三百三十七雑十二「災異」の「○天火」から取っているためです。』とお教え下さり、国立国会図書館デジタルコレクションの画像を添えて下さった。ここである。再拜謝意を申し上げます。

「晋の義熙十一年」東晋の元号。四一五年。

「京都」東晋の首都は建康（南京の古称）。

「吳界」吳郡との堺の意。

「信幡」印とする旗。

「南人」賤人の意か。

「類聚名物考」既注。[国立国会図書館デジタルコレクションのここ](#)。

「東鏡一二に「建久三年四月三十日丑尅、若宮職掌紀藤太夫宅焼亡……」これも底本に引用の不備があるので所持する「吾妻鏡」によって訂してある。この話、「吾妻鏡」では、かなりけつたいな話の一つとして、かなり知られたものである。一つはこの年の三月に後白河法皇が崩御し、同年七月十二日に即位した後鳥羽天皇によって頼朝が征夷大将軍に任ぜられた、その絶妙なインター・ミッションの時期に当たるからである。実は、この日の前の記載に（以下、本文の後ろに（ ）で書き下し文を示した）、

\* 廿九日庚午。大流星飛行云々。天文所示。吉凶難定者歟。

（廿九日庚午。大流星、飛行すと云々。天文の示す所は「吉凶、定め難き者か」と。）

\* という異変が記されてあって（「天文」は天文学的変異を占う天文家）、次が深夜丑三つ時の鶴岡八幡宮の神楽を演ずる役の者であった「紀藤大夫」の家が焼け落ち、彼がまた、異様にも自ら、「これは、絶対に、天の神がつけた火で御座る。」と言ったというのである。而して、熊楠が述べる通り、実は、そのまた翌日の記事に、

\* 五月一日壬申。鶴岡宮備供祭。巫女職掌等群参。而紀藤大夫俄以狂亂。吐詞云。見小壺楠前【在町末邊女云々。】日來通艶言之處。奉鑄神鏡。安家中。近日欲持参于鶴岡宮之由稱之。不許容之間。去廿九日夜。雖欲令燒彼家。依指合默止畢。去夜取松明。出行之時。思彼女宅之由。燒自宅云々。則義慶房。題學房加持之云々。

（五月一日壬申。鶴岡宮に供祭を備ふ。巫女・職掌等、群参す。而るに、紀藤大夫、俄かに以つて狂亂し、詞を吐きて云はく、

「小壺の楠前【「町末の邊りに在る女と」云々。】を見て、日來、艶言を通ずるの處、『神鏡を鑄奉りて、家の中に安んず。近日、鶴岡宮に持参せんと欲する。』の由、之れを稱して、許容せざる間、去ぬる廿九日の夜、『彼の家を焼かしめん。』と欲すと雖も、指合に依つて、默止し畢んぬ。去ぬる夜、松明を取りて、出で行くの時、彼の女の宅の由を思ひて、自宅を、焼く。」

と云々。  
則ち、義慶房・題學房、之れを加持すと云々。）

\* という大珍事が起こったのであった。「供祭」は神仏へ御供え物をして祀ることを指す。

「小壺」は現在の逗子市小坪。頼朝が開幕以来最大の危機を迎えた『「亀の前」事件』で彼

女を最初に隠していたのも、実は、ここであつたのである。[私のサイト版「新編鎌倉志卷之七」](#)の「飯島」の条を読みたい。「指令に依て黙止し」とは「差し支えることがあつたので止めた」の意。或いは先の「大流星」が気になつたのかも知れない。この発狂（神職である者の過度の淫欲の罰が当たつたと概ね考えられたのであろう）や自宅への火付け、そして、その実行予定日の大流星の符合が、頼朝を始めとした幕閣や、鎌倉の民草総てに、神意の恐ろしさを告げたものとなり、その神の怒りを鎮めんがために、最後の加持祈禱が修せられたというわけである。寧ろ、私は、先に太字にした部分から、女好きであつた頼朝にとつては、トラウマのフラッシュ・バックされる事件であつたと踏んでいるのである。そうして、未だ到来しない征夷大將軍の宣旨に対する焦燥感も加わってくれば、我々の想像以上の恐懼を頼朝は感じたに違いないと私は考えるのである。それが意外に深刻なものとして頼朝に捉えられていたことは、熊楠が記している通り、その発狂事件から、十一日後の、五月十二日の条に、

\*

十二日癸未。幕下令奉神馬二疋於鶴岡上下宮給。是紀藤大夫所爲聞食及間。神威嚴重。今更依有御崇重。如此云々。

（十二日 癸未。幕下、神馬二疋を、鶴岡上・下宮に奉らしめ給ふ。是れ、紀藤大夫が所爲を聞き食し及ぶの間、神威の嚴重、今更に、御崇重有るに依りて、此のごとしと云々。）

\*

ことから、よく判ると私は感ずるのである。言っておくと、鎌倉史は私の三十五年来の守備範囲で、ど素人ではない。

「福本日南」（にちなん 安政四（一八五七）年〜大正一〇（一九二一）年）はジャーナリスト・政治家・史論家。[ウィキの「福本日南」](#)によれば、勤王家の福岡藩士福本泰風の長男として福岡に生まれた。本名は福本誠。司法省法学校（東京大学法学部の前身）に入学したが、「賄征伐」事件（寮の料理賄いへ不満を抱き、校長を排斥しようとした事件）で原敬・陸羯南らとともに退校処分となった。その後、『北海道やフィリピンの開拓に情熱を注ぎ』、明治二一（一八八八）年、同じ『南進論者である菅沼貞風と知友となり、当時スペイン領であつたフィリピンのマニラに菅沼と共に渡つたが、菅沼が現地で急死したため、計画は途絶した』。『帰国後、政教社同人を経て』、翌明治二十二年には陸羯南らと『新聞『日本』を創刊し、数多くの政治論評を執筆する。日本新聞社の後輩には正岡子規があり、子規は生涯日南を尊敬していたという』明治二十四年には、発起人の一人となつて『アジア諸国および南洋群島との通商・移民のための研究団体である東邦協会を設立』、『その後、孫文の中国革命運動の支援にも情熱を注いでいる』明治三八（一九〇五）年、『招かれて』、『玄洋社系の「九州日報」（福陵新報の後身、西日本新聞の前身）の主筆兼社長に就任』、二年後の第十回『衆議院議員総選挙に憲政本党から立候補し』て当選した。一方、同年に「元禄快拳録」の連載を『九州日報』紙上で開始している。これは『赤穂浪

士称讚の立場にたつ日南が、『忠臣蔵』の『巷説・俗説を排して』、『史実をきわめようと著わしたものであり、日露戦争後の近代日本における忠臣蔵観の代表的見解を示し』、『現在の』『忠臣蔵』の『スタイル・評価を確立』したものとされる。彼は明治三一（一八九八）年から翌年にかけて、パリやロンドンに滞在しており、ロンドンでは、南方熊楠と出会い、この時の交遊を描いた随筆「出てきた賊」を明治四三（一九一〇）年に『大阪毎日新聞』に連載、これがまさに熊楠を日本に初めて紹介した記事であるとされるのである。」

（神燈）。唐の釋道宣の列塔像神瑞迹に、「簡州三學山寺、有佛跡、毎夜神燈在空、遠見近滅、至大齋夜、其燈則多」《簡州の三學山寺に、佛跡有り。毎夜、神燈、空に在り、遠きは見え、近きは滅ゆ。大齋の夜に至れば、その燈、則ち、多し》。淵鑑類函三六〇に、「孔帖、唐玄宗朝調亳州太清、上尊號、是夜神燈現」《「孔帖」に、『唐の玄宗、亳州の太清に朝謁し、尊號を上らる。是の夜、神燈、現ず。』と》。韻府二五に、朱子の方廣聖燈の詩、「神照燈夜惟聞說、皓月當空不用尋」《神燈 夜を照らすこと 惟だ聞説するのみ 皎月 空に當りて 尋ぬるを用いず》。是で聖燈神燈は同一物と判る。

「やぶちゃん注」：釋道宣の列塔像神瑞迹 初唐の律宗僧で南山律宗の開祖である道宣（五九六年～六六七年）の「広弘明集」の中の卷十五の「仏徳篇」中の一篇らしい。

「簡州」唐代から民国初年にかけて現在の四川省成都市簡陽市（グーグル・マップ・データ）一帯に置かれた州。

『朱子の方廣聖燈の詩、「神照燈夜惟聞說、皓月當空不用尋」底本では「神」は「仙」であるが、朱熹の詩篇文字列で検索したところ、複数の信頼出来るサイトで「神」であることが判ったので、訂した。』

（仙燈）。韻府二五、丁復送僧過廬山《僧の應山を過ぐるを送る》詩に、「仙燈夜半天人落、佛屋春深海客過」《仙燈 夜半に 天人 落ち 佛屋 春深くして 海客 過ぐ》。隱居通議の、廬阜の文珠の天燈を云ふのだ。

「やぶちゃん注」：「丁復」元代の詩人。この詩は中国ではよく知られている詩のようである。」

（文珠燈）韻府二五に、周必大天池觀文珠燈（天池に文珠燈を觀る）詩を抄載す。倭漢三才圖會七七、天の橋立の松林の中有文珠堂、自海底出現云々、毎月十六日夜半後、丑寅方海澳出龍火、浮寄堂北邊、正五九月十六夜則一火天降、謂天燈、又一燈者名伊勢御燈者、堂前有松一株、名御燈松（拾芥抄云、智恩寺ハ丹後九世ノ戸ノ文珠、天龍六齋供燈明云々）《松林の中に文珠堂有り。海底より出現ありし》云々。「毎月十六日の夜半の後に、丑寅の方の海澳より、龍火を出だす。堂の北邊に浮き寄る。正・五・九月の十六夜には、則ち、一火、天より降る。之れを「天燈」と謂ふ。又、一燈、「伊勢の御燈」と名づくる者有り、堂の前に松一株有り、「御燈」の松と名づく【「拾芥抄」に云はく、『智恩寺は丹後九世の

戸の文珠。天龍、六齋、燈明を供す』云々)。》妙法蓮華經の提婆達多品に、智積菩薩、多寶如來に本土寶淨國に還らんことを勧めると、「釋迦牟尼佛、告智積曰、善男子、且待須臾、此有菩薩名文珠師利、可與相見、論說妙法、可還本土、爾時文珠師利坐千葉蓮華、大如車輪、俱來菩薩亦坐寶蓮華、從於大海娑竭羅龍宮、自然涌出、住虛空中、詣靈鷲山」《釋迦牟尼佛、智積に告げて曰はく、「善男子、且つ、須臾く待て。此に菩薩有り、『文珠師利』と名づく。共に相ひ見るべく、妙法を論說して、本土に還るべし。」と。爾の時、文珠師利は、千葉の蓮華、大なること、車輪のごとくに坐す。俱に來たりし菩薩も亦、寶蓮華に坐し、大海の娑竭羅龍宮より自然に涌き出だし、虚空の中に住み、靈鷲山に詣る。》。其から智積が法華經の力を問ふに答へて、娑竭龍王の女八歳なるが、此經を持した功德で忽ち男子と化り成佛した由を述べ居る。この他にも、諸經に天と龍が文珠を敬禮する話多く、ネパウル國「やぶちゃん注・ネパール。」の古傳に、初め毘婆尸佛が龍住池に蓮を種えると、獨一法身が其蓮華から火焰身を化出し、此火今に燃居る。唯一法身の后般若水と現じた時、火焰佛出て來たので、文珠菩薩かの聖火（乃ち火焰佛）の上に無骨身塔を建てんとするに水出て止まず、石を据る事成らず。文珠精誠念誦して甫めて水止まり、塔を築き得たと有る（一八四二年板ベンガル亞細亞協會雜誌卷一二、ホジソン譯ネパール國經四〇二頁）。何だか夢の様な譚だが、彼國でも文珠は多少龍と火に關係ある證〔あかし〕とは成る。此様に文珠と龍と縁が切れぬ所から、切戸（一名九世戸）へ天燈など點ると云ふたので、此等の名は文珠燈と俱に支那傳來に外ならじ。〔やぶちゃん注・「倭漢三才圖會」は所持する原本と比較対照した。【】で示したのはその原本の二行割注部である。〕

（聖燈）。田中由恭の祇園南海先生詩集三、「遊紀三井山」《紀の三井に遊ぶ》詩、「昌國一燈傳聖燄」《昌國の一燈 聖燄を傳ふ》の句の注に、「補陀落山在昌國縣海中、其八景中有洛伽燈火蓮洋古渡」《補陀落山は昌國縣の海中に在り。其の八景の中に、洛伽の燈火、蓮洋の古き渡し、有り。》。この洛伽燈は果して紀三井山の龍燈と同様の物か否か分らぬが、兎に角南海が紀三の龍燈を聖燄と做したのは、支那で龍燈を聖燈と呼ぶ例あるに據つたので、上に引いた廣輿記に、蓬州の山燈の最も異なる奴を「土人呼爲聖燈」《土人、呼んで聖燈と爲す。》とあり、朱子の方廣聖燈の詩も、上の神燈の條に既に言うた。韻府二五、宋史渤海國傳、「拜聖燈五臺之上」《聖燈を五臺の上に拜す》、また上「やぶちゃん注」の「の脱字か。」廬山紀事、「天池文殊院西、有聖燈巖」《天池は文殊院の西。聖燈巖有り。》、また清涼山志、「張商英來游、至眞容院、僧曰、此處有聖燈、商英乃稽首默禱、西後見黃金寶階、戊初北山有大火炬、僧曰、聖燈也」《張商英、來游して眞容院に至る。僧曰はく、「此處に聖燈有り。」と。商英、乃ち、稽首默禱す。西の後、黄金の寶階を見、戊の初め、北山に大火炬有り。僧曰はく、「聖燈なり。」と。》、孔武仲宿天池《天地に宿す》詩、「聖燈稍々出、弄影何窈窕」《聖燈は稍々と出で 影を弄ぶこと 何ぞ窈窕たる》。慈覺大師入唐求法巡禮行記三に、五臺山に上った時、「初夜臺東、隔一谷嶺上、空中見聖

燈一盞、衆人同見禮拜、其燈光初大如鉢許、後漸大如小屋、大衆至心高聲唱大聖號、更有一盞燈、近谷現、亦初如笠而漸大、兩燈相去遠望十丈許、燈火焰然、直至半夜沒而現矣」《初夜「やぶちゃん注…午後六時から九時頃。」、臺の東、一谷を隔つる嶺上に、空中に聖燈一盞「やぶちゃん注…ここは「一つの小さな盃ほどの丸い光りの球」の意。」あるを見る。衆人、同じく見て禮拜す。其の燈光、初め、大いさ、鉢許りのごとく、後、漸、大いさ、小屋のごとし。大衆は、至心もて、高聲に「大聖」の號を唱ふ。更に、一盞の燈、有り、谷に近く現ず。亦、初め、笠のごとくして、後、漸、大たり。兩燈、相ひ去ること、遠く望むに、十丈許り、燈火、焰然として、直に半夜に至り、沒して、現ぜず。》。是は羅馬人の所謂カストル及ポルクスの火だらう（下を見よ）。大清一統志一四八、「商州聖燈龕在鎮安縣北三十里、相傳每良夜、常見燈懸崖畔因名」《商州の聖燈龕は鎮安縣の北三十里に在り。相ひ傳ふ、良夜毎に、常に、燈の、崖畔に懸かるを見る、因つて名づく。》。前述支那土耳其斯坦「やぶちゃん注…「トルキスタン」の燈巖の如く、月明かな夜毎に其光を反射して點燈した様見えるのであらう。

「やぶちゃん注…「清涼山志」明の釈鎮澄撰の山西省五台県の東北にある五台山の仏教的地誌かと思われる。なお、この「清涼山志」中の「西後見黃金寶階」の「階」は底本も「選集」も「塔」であるが、信頼出来る複数のサイトで「階」とするので、そちらを採用した。

「カストル及ポルクスの火」双子座のことであろう。ポリュデウケースはボクシングの名手で、兄のカストールと協力し、数々の手柄をたてた。ポリュデウケースは神の血を受け継いで不死身だったが、人間だった兄が戦死してしまい、神に慈悲を乞うて、兄とともに天にいたることを許されたというローマ神話がある（[ウィキの「ポリュデウケース」に拠った](#)）。

（菩薩燈）。斯様な名は無いが、龍燈を菩薩が空中に放光すと見たのだから、此名を用ひても差支なからう。宋高僧傳一五、唐朝の僧鑑源の傳に、「其山寺（漢州開照寺）云々、有慧觀禪師、見三百餘僧、持蓮燈凌空而去、歷々若流星焉、開元中崔冀公寧疑其妖妄、躬自入山宿、預禁山四方面各三十里火光、至第三夜、有百餘支燈現、兼紅光可千尺餘、冀公蹙然作禮、歎未曾有、時松間出金色手、長七尺許、有二菩薩、黃白色閃爍然、復庭前柏樹上、晝現一燈、其明如日、橫布玻瓈山可三里所、寶珠一顆圓一丈、熠燿可愛、西嶺山門懸大虹橋、橋上梵僧老叟童子間、出有二炬爛然空中、如相迎送交過之狀、下有四菩薩、兩兩偶立、放通身光、可高六七十尺。復見大松林、後忽有寺、額篆書三學字、又燈下垂繡帶二條、東林之間夜出金山、月當于午、金銀二色燈、列於知鉞師墳側、韋南康臯、每三月就寺設三百菩薩大齋、菩薩現形捧燈、僧持香燈、引挹之爐、在寺門矣《其の山寺（漢州の開照寺）》云々、「慧觀禪師有り、三百餘の僧、蓮燈を持って空を凌りて去るを見る。歴々として流星のごとし。開元中、崔冀公、「寧ぞ、其れ、妖妄ならんや。」と疑ひ、躬自ら山に入りて宿し、預め、山の四方面、各々、三十里「やぶちゃん注…唐代の一里は五百五



十九・八メートル。十六・七九四キロメートル四方。」の火光を禁ず。第三夜に至りて、百餘支の燈、現じ、兼ねて、紅光、千尺餘たり。冀公、蹶然として禮を作し、「未だ曾てあらず。」と歎ず。時に松の間に、金色の手、長さ七尺許りなるが、出づ。二菩薩、有りて、黄・白・金、色、閃爍たり「やぶちやん注…明るく照り輝くさま。」。然るに、又、庭前の柏樹の上に、晝、一燈を現す。其の明るきこと、日のごとく、横さまに玻瓈「やぶちやん注…「玻璃」に同じ。水晶。」を布く。山の三里の所に、寶珠、一顆あり、圓さ一丈、熠燿「やぶちやん注…はつきりと光り輝く火の光り。」として愛すべし。西嶺の山門には、大虹橋、懸かり、橋上に梵僧・老叟・童子、間はりて出づる。二つの炬あり、空中に爛然として、相ひ迎へ送りて、交はり過ぐる状のごとし。下に四菩薩有りて、兩々ら偶びて立ちて、通身、光を放つ。高さ六、七十尺ばかりなり。復た、大松林の後ろに、忽ち、寺額有るを見る。「三學」の字を篆書し、又、燈下に繡の帶二條を垂る。東林の間には、夜、金山を出だす。月の午するに當たりて、金銀二色の燈、知鉉師の墳の側らに列ぶ。韋南康阜「やぶちやん注…「韋阜」は唐代の官人の姓名。「南康」は地名であろう。ちよつと珍しい表記である。」、三月毎に寺に就いて三百菩薩の大齋を設くるに、菩薩、形を現じて、燈を捧ぐ。僧、香燈を持し、引き抱したる鑪、寺門に在り。」と。餘り大層な話で、どうも僧輩が結構でした事としか解し得ぬが、菩薩が燈を捧げて出た時、僧が香爐（線香か）を以て其火を香爐に抱し、今に寺門に存すと云ふのは、後文に出すべきエルサレムの聖火の事と同じである。

「やぶちやん注…この長大な引用については、『中國哲學書電子化計劃』の『宋高僧傳』の影印本の当該条を視認し（引用の開始は次の丁から）、底本とも「選集」とも違うより正確と判断した原文を示した（表記はその影印本に従った）。また、訓読も私がよしとする読みで示した。読んでいて、最後の「鑪」がよく判らなかつたのだが、熊楠が指示する「香爐」で腑に落ちた。なお、「宋高僧傳は唐・五代・北宋初期の高僧の伝記を集めた書物で、全三十卷。北宋の贊寧による奉勅撰にして九八八年に成立したものである。」

斯種々の支那名が有り、又本邦と同物を指す龍燈なる名が確かに支那に在つたと云ふ證據は未だ見出さぬが、便宜の爲以下書物から引く毎に各其書に用ひた通りの火の名を用ひ、一汎に法類の火を指す時は龍燈の名を用ひる事とする。

「やぶちやん注…「法類」は「選集」では『この類』となつてゐる。しかし、前出の不思議な「火」は圧倒的に仏教絡みであるからして、「法」でも何ら違和感はない。但し、中国や本邦のそれらの中には、怪火として、凶悪なものもある。ただ、それらを「龍燈」とは區別して絶対にそうは呼ばないし、ある種の怪火の伝承には、この世に怨念や未練を残した亡者が悪鬼となつて怪火を成すというストーリーも多く見られ（仏の慈悲で目出度く往生する話もある）、これもまた、仏教範疇の辺縁にあるものも多い。」

扱龍燈は、多くは高空中又は樹とか塔とか高い物の尖へ出る様だ。吾邦の例は尾芝君

既に擧げたから今更復言はずとして、續高僧傳四に、摩竭陀國の鷄足山、「頂樹大塔、夜放神炬、光明通照、即大迦葉波寂定所也」《頂きに大塔を樹つ。夜、神炬を放ちて、光明通く照らす。即ち、大迦葉波の寂定せる所なり》。西域記九には、山上に塔を建つ、靜かな夜これを遠望すると 炬のごとき明光有るも、山を登れば何も見えぬと有る。三寶感通錄二に、「簡州三學山寺有佛跡、常有神燈、自空而現、每夕常爾、齋日則多、州宰、意欲尋之、乘馬來寺、十里已外、空燈列現、漸近漸昧、遂竝失之、返還十里、如前還現、至今不絕」《簡州の三學山寺に佛跡有り。常に神燈の空よりして現ず。每夕、常に爾り。齋日は、則ち、多し。州宰、之れを尋ねんとする意を欲し、馬に乗りて寺に來たる。十里已外より、空燈、列び現じ、漸近づけば、漸、味く、遂に、竝びて、之れを失ふ。返還ること十里、前のごとく、復た、現ず。今に至るも絶えず》。隋の王劭の舍利感應記に、「蒲州、栖霞寺起塔（仁壽元年の事）。十月十三夜、浮圖上又有光、如三佛像、竝高尺、停住久之」《蒲州、栖霞寺に塔を起つ（仁壽元年の事）。十月の十三夜、浮圖の上に、又、光り有り、三佛の像のごとく、竝びの高さ尺にして、停住すること之れを久しうす》。此塔より夜分光を出す、「諸光多紫赤、而見者色狀不必同、或云大電、或云如燎火、其都無所見者十二三、有婦人、抱新死小兒、來乞救護、至夜便蘇、遇燈光照以愈疾者非一」《諸光、多く、紫赤にして、見る者、而して、色・狀、必ずしも同じからず。或いは大電のごとくと云ひ、或いは燎火のごとくと云ふ。その都て見ることなき者は、十に二、三なり。婦人有り、新たに死せし小兒を抱き、來たつて救護を乞ふに、夜に至りて、便ち、蘇る。光の照らすに遇ひて以つて疾ひを愈せし者、一のみに非ず》。見る人の説も一定せず全で見ぬ人も有り、又光に照されて病愈えたなど群集錯誤が流染したと見える。又云く、「鄭州於定覺寺起塔、舍利將至寺東、有光如大流星、入至佛堂前沒、輿到此處、無故自止、既而定塔基於西岸、其東岸舊舍利塔、有三光、西流入於基所入云々」《鄭州、定覺寺に塔を起つ。舍利、將に寺の東に至らんとするに、光、有り、大流星のごとし。入りて佛堂の前に至りて、沒ゆ。輿、此の處に到りて、故無くして自ら止まる。既にして、塔基を西岸に定む。其の東岸の舊舍利塔に、三光、有り、西に流れて基の所に入る云々》。これは流星の花火でも仕掛けて愚人共を欺いたのであらう。續高僧傳四、「烏荼國東境、臨海有發行城云々、次南大海中僧伽羅國有云々。相去約指二萬餘里、每夜南望、見彼國中佛牙塔上寶珠、光明騰焰、暉赫見於天際」《烏荼國の東の境、海に臨みて、發行城、有り云々、次いで、南の大海中に僧伽羅國有り云々。相ひ去ること約そ指すに二萬餘里。每夜、南望すれば、かの國中の佛牙塔上の寶珠、光り明きて焰を騰げ、暉り赫めきて天際に現するを見る》。是も高塔上に強い光を仕掛で出した事と見えるが、塔が時に異光を放つと云ふ事古くより人心に浸潤し居たは、高僧傳一に、「晉の咸和中蘇峻作亂、焚康僧會所建塔、司空何充復更修道造、平西將軍趙誘世不奉法、夢入此寺、謂諸道人、久聞此塔屢放光明、虛誕不經、所未能信、若必自覩、所不論耳、言竟塔即出五色光、照耀堂刹、誘肅然毛豎、由此信敬」《晉の咸和中、蘇峻、亂を作し、康僧會の建てし所の塔を焚く。司空何充、又、更に、修造す。平西將軍趙誘、世に法を奉ぜず。夢に、この寺に入りて、諸道人に謂ふ、

「久しく聞く、『此の塔、屢しばしば、光明を放つ。』と。虚誕不經きょたんふけいにして、未だ信ずる能はざる所なり。若し、必ず、自ら覩みづかれば、論ぜざる所とすのみ。」と。言ひ竟るや、塔、即ち、五色の光を出だし、堂刹を照り耀かす。誘、肅然として、毛、豎たつ。此れに由りて、信敬す。居常、塔頂放光のことを聞いて自然じぜん心に浸ひたり込んで居たから、疑ひながらも夢に見たのだ。

「やぶちゃん注…以上の漢籍仏典は概ね日中の「大蔵経」のデータベースで原表記を確認して底本を訂した。

「吾邦の例は尾芝君既に擧げた」『尾芝古樟（柳田國男）「龍燈松傳説」』を参照されたい。「續高僧傳」梁の慧皎の「高僧伝」に続けて撰せられた中国の高僧の伝記集。盛唐の道宣（五九六年～六六七年）撰で、全三十卷。六四五年の成立である。

「摩竭陀國」「マガダ」国は古代インドのガンジス川中流域を支配した王朝名。紀元前六世紀から紀元前五世紀頃から栄えた。

「鷄足山」伽耶城がやの南東にあり、釈迦の弟子迦葉が入寂したと伝えられる鷄足洞がある。ククタパダ山。現行ではここ（グーパ山・グーグル・マップ・データ）に比定されているようだが、しかし、ここは逆立ちしてもガンジス川中流とは言えない。

「三寶感通録」「集神州三寶感通録」。同じく道宣によって編纂されたもの。

「王劭」（？～六〇八年？）は隋の学者。字は君懋。山東省太原の出身。著作郎・秘書少監を歴任し、道教と仏教を交えた教理により、「真人革命」を説き。「皇隋靈感誌」を著わした。

「蒲州」南北朝時代から民国初年にかけて現在の山西省運城市（グーグル・マップ・データ）一帯に設置された州。

「仁壽元年」隋の文帝楊堅の治世に行われた二番目の元号で元年は六〇一年。

「鄭州」現在の河南省の省都である鄭州市附近（グーグル・マップ・データ）。三千五百年前の商（殷）王朝の都邑があったことで知られる。

「烏荼國」東インドの旧国名。

「僧伽羅國」現在のスリランカ。

「晋の咸和中」南北朝時代の東晋の成帝司馬衍の治世に行われた最初の元号。三二六年～三三四年。

「蘇峻」（そしゆん ？～三二八年）は東晋の武将。当該ウィキによれば、『西晋末期の動乱による流民を糾合して豪族として台頭し、東晋の建国と共に官位を得て軍功を挙げた。しかし』、『後に東晋朝廷からの警戒が強まると』、『朝廷への反乱を起こし（蘇峻の乱）、首都建康を陥落させるまでに至ったが、その後の会戦』で、『優勢に驕って少数の兵で敵陣へと攻め込んだ結果、落馬して戦死した』とある。

「康僧會」（？～二八〇年）は三国時代の呉の訳経僧。当該ウィキによれば、先祖は康居（嘗て中央アジアにあったとされる遊牧国家）の人で、『インドに住んでいた。僧会の父親は商人であり、交趾（ベトナム）に渡った』。『父母に死別し、その後、出家修道を始め

た。また、天文学・讖緯の学にも通じていた。二四七年、『呉の都の建業に入り、孫権の支持を得て、江南地方で最初の仏教寺院の建初寺を建立した、とされている。但し、康僧会に先立って、支謙が既に』二十『年以上前に江南に宣教していることを考えると、この建初寺のエピソードは、僧会を讃仰するために出来た俗説とも考えられる。また、交阯では江南より早く仏教が伝わっていたことから、ベトナム』の『建初寺』『が先に建立されたという前提で、名前を取ったという説もある』。『その後、經典の漢訳に従事し、中でも』、『六度集経』は『訳経されたものではなく、康僧会自身の著述であろうと考えられている』。『また、孫皓との間で繰り広げられた、因果応報に関する対論が、その伝記に記載されており、初期の中国仏教と儒教的な観念との接触、交渉の端緒として、見るべきものがある』とある。

「平西將軍趙誘」(?～三二七年)は西晋末期から東晋初期の官僚で軍人。当該ウイキによれば、『淮南郡の人』で、『西晋末期からの反乱討伐で活躍するも、最期は杜曾に敗れて討死した』。『西晋に仕え、揚州刺史郗隆』(きりゅう)『の主簿に任じられていた』。三〇一年三月、『趙王司馬倫の專横を打倒すべしとの齊王司馬冏』(しばけい)『の檄文が揚州に至った。郗隆は檄文に応じるべきか、吏僚を召し出して問うた。趙誘と虞潭は「趙王の篡逆の意は、皆憎むところであり、四方から義兵が起ち、必ず趙王を破るでしょう。自ら精兵を率いて許昌に赴くのが上策。將兵を遣わし、加勢するのが中策。少数の兵を遣わし、形ばかりの助勢で勝ちに乗じるのが下策です」と進言した。郗隆はどっちつかずの対応をしたために、參軍王邃に攻められ、子及び別駕顧彦とともに殺害された』。『趙誘は官を辞して家に還り、門を閉ざして、家から出ることはなかった』が、後に『左將軍王敦の參軍に任じられ、広武將軍を加えられた』。三二一年六月、『歴陽内史甘卓・揚烈將軍周訪とともに華軼』(かいつ;西晋の武將)『討伐にあたり、これを破った』。三二三年八月、『西晋に反乱を起こした杜弼』(とどう)『?～三二五年』西晋末に活動した流民勢力の首領)『討伐にあたり、龍驤將軍陶侃』(とうかん;陶淵明の曾祖父として知られる)『の指揮下に入り、振威將軍周訪とともに前鋒として杜弼軍を破った。荊州刺史に転じた陶侃に代わり、武昌郡太守に任じられた』。『その後も杜弼討伐に甘卓とともにあたり、これを滅ぼし』、『長年の累功により、平阿県侯に封じられた』。三二七年八月、『大將軍王敦』(おうおとん)『の命により、襄陽郡太守朱軌・將軍李恒とともに荊州で反乱を起こした鄭攀』(ていはん)『らを討伐した。鄭攀らは懼れ、司馬孫景が主謀したとこれを斬り、降伏した』。翌九月、『荊州刺史王嵩』(おうこう)『の命により、朱軌・陵江將軍黃峻とともに反乱を起こしていた杜曾と女觀湖で戦った。趙誘らは敗れ、子の趙龔』(ちようきよう)『とともに討ち取られた』。『王敦は趙誘の死を惜しみ、征虜將軍・秦州刺史を贈位するよう上表、敬と諡された。晋王司馬睿は趙龔に新昌郡太守を贈位した』とある。

「虚誕不經」根拠がなく出鱈目なこと。」

甲子夜話續十四、崇徳上皇、白峯陵へ天より御靈降ひりくだつて夜光を放つ故光堂と云ふと有る。

上に類聚名物考から孫引した中山傳信録所謂天妃の神燈は、五雜俎四に、「海上有天妃、神甚靈、航海者多著應驗、如風濤之中、忽蝴蝶雙飛、夜半忽現紅燈、雖甚危必獲濟焉」《海上に天妃あり、神、甚だ靈なり。航海者に應驗著る者、多し。如し、風濤の中に、忽ち蝴蝶の雙び飛び、夜半、忽ち、紅燈の現はれば、甚だ危うしと雖も必ず濟はるるを獲。》と出ると同物だ。諸國里人談三に隱岐の海中に夜火海上に現ず是は燒火權現の神靈也、何れの國でも難風に遭うた船夜中方角を別たざるに、此神に立願し神號を唱ふれば此火現じて助け呉れると有つて、後鳥羽上皇流されたまひし時、この火に風難を救はれ玉ひし節の御詠を載す。甲子夜話續九七には備後木梨の海の事とし、後醍醐帝の御歌を出す。同書六〇に寛政の頃長崎に向ふ支那船、海上惡風四方闇黒なるに遭ひて方角を辨ぜず、折節神有り 舳に現じ、洋中火光を見る方に向へ、吾は日本金毘羅神也と告げたので、火光を尋ねて行き船を全くした。その報賽に額を讚州金毘羅に捧げたと有る。

「やぶちゃん注」甲子夜話續十四、崇徳上皇、……「フライング単発 甲子夜話續篇卷之十四 9 讚岐院の御陵」を参照。

「諸國里人談三に隱岐の海中に夜火海上に現ず……」私の「諸國里人談卷之三 焚火（たぐひ）」を参照されたい。

「甲子夜話續九七には備後木梨の海の事とし、後醍醐帝の御歌を出す」「フライング単発 甲子夜話續篇卷之九十七 9 備後國木梨海中陰〔火〕并證詞 付 隱岐國智夫郡神火之事」を参照。

「同書六〇に寛政の頃長崎に向ふ支那船……」「フライング単発 甲子夜話卷之六十 1

8 金毘羅の靈異邦に及ぶ」を参照。以上の「甲子夜話」のそれは、本篇のこれらの注のために、新たに電子化したものである。

「報賽」祈願が成就したお札に神仏に参拝する「お札参り」のこと。」

是等の火光は無論悉く一類の物で無く原因種々有るべきも、概して言へば西洋でエルモ尊者の火と稱ふるものを指すのだろう。エンサイクロペジア、ブリタンニカ一板卷二及び二十四に據ると、此火は空中から徐々と地上に向ひ發する雷氣に伴ふ光で、其性質は物理試験室で行ふ刷毛出（ブラシユで）の摩擦電氣に伴ふ光と同じく、物がひびわれたり又竈の火が 嘯き鳴る様な音之に伴ふこと多く、之を最も多く見るは冬月風雪中及び其後、又迅雷中にも屢ば生ず。奥太利「やぶちゃん注」：「オーストリア」のソンプリク山殊に此火多きをエルスター及びガイテルが調べて一八九一年に報告せしは其發電時として陰性で光赤く時として陽性で光青し。ゴツケル言く、雪中に此光出るを検するに、雪片大なれば、其電氣陽性、雪片細かければ其電氣陰性だと。而して此光主と現ずるは尖つた物の末で、塔頂橋端 又人が手を擴げた指尖にすら附くことあり（以上エンサイクロペジア）。同書に、エルモ尊者の名は伊太利人がエラスムスを訛つたので、エラスムス尊者は紀元三百四年車裂されて殉教したが、永く地中海航者の守本尊と仰がれ、舟人此火を尊者庇護し賜ふ 徴とす。英國水夫之をコルポサンツと呼ぶは、伊語のコルポ・サント（聖體）



スター (Julius Johann Philipp Ludwig Elser 一八五四年～一九二〇年)。

「ガイテル」エルスターと共同研究したドイツの物理学者ハンス・フリードリッヒ・カール・ガイテル (Hans Friedrich Geitel 一八五五年～一九二三年)。因みに彼は「原子エネルギー」という語の創始者とも言われているようである。」

一九〇五年板ハズリットの諸信及俚傳 (Hazlitt, 'Faihs and Folklore') 卷一・九四頁に、西班牙「やぶちゃん注：「スペイン」]人、佛蘭西人は之をヘルメス又テルメス尊者の火、伊太利人はペトロ又ニコラス尊者の火と云ふと有つて、一五九八年板、ハクロイトの航記集から此火の實視譚を引き言く、「予船上大風波に遭うた夜、小蠟燭に點した程の小光、西班牙人の所謂聖體が中檣の頂に來り、其より他の檣頂へ飛び移り又飛び戻り或は二三檣頭一時に光り出した」と。又一七〇四年板暴風誌 (History of Storms) 等を引いて、俗信に此火一つ現ずれば風浪の兆、二つ相近づいて出ずれば晴天の徴と云ふ。或は云く、此火五つ群がり出れば風浪將に息まんとするを示す。葡人「やぶちゃん注：ポルトガル人。」これを救世主の頸と名くと。古ローマのプリニウスの博物志 (Historia Naturalis) 卷二の三七章に此火を説いて云く、「此星、海陸共に出づ。予曾て夜警兵卒の檣上に星様の光を見た。又鳥が飛び廻はる様な音して進航中の舟の帆架等に留る。一つ見ゆれば難破の兆で、船體の下部に觸るれば火を燃出す事有り。然るに二つ現ずれば吉兆でヘレナちふ悪星を逐攘ふと信ぜられ、之を神としてカストル及びポルクスと稱ふ。又時として夜分人の頭の周りに輝く事有つて、或大事件を前示す」と。カストルとポルクスは大神ゼウスの二子で、カストル人と闘つて死せしを悲しみ、ポルクスその身不死なるにゼウスに請て自分亦死せんとす。ゼウス其悌心を賞し隔日に冥界に降つてカストルを見せしむ。或は云くゼウス二人を天上に眞き、太白と長庚たらしむと、雅典の人之を神と崇め守護尊と號け、航海に軍旅に其助力を頼み、難風に逢ふ舟人檣頭に焰光を見れば此神靈なりとて、白羊兒を牲し奉らんと祈念すれば風浪忽ち靜まると信じた (一九〇八年板サイツフェルトの希臘羅馬考古辭典英譯、A Dictionary of Classical Antiquities, 百九四頁)。

(大正四年九月郷土研究第三卷七號)

「やぶちゃん注・最後の初出は**底本では前行下方のインデント**であるが、ブラウザえの不具合を考え、改行し、上に引き上げた。

「一九〇五年板ハズリットの諸信及俚傳 (Hazlitt, 'Faihs and Folklore') 卷一・九四頁」中黒「・」使用は本書では珍しい。イギリスの弁護士・書誌学者・作家ウィリアム・カルー・ハズリット (William Carew Hazlitt 一八三四年～一九一三年) 著の「信仰と民俗学」。

「Internet archive」の当該書原本のこちらのページから始まる「Castor and Pollux」の左ページの左が当該部。

「一五九八年板、ハクロイトの航記集」上記原文に、*Scotish Encyclopedia, v. Lights, Stevens* quotes the subsequent passage from Hakluyt's Voyages, 1598, 249<sup>o</sup>.

「予船上大風波に遭うた夜、小蠟燭に點した程の小光、西班牙人の所謂聖體ケルホ・サント・メレン・マストが中櫓の頂に來り、其より他の櫓頂へ飛び移り又飛び戻り或は二三櫓頭一時に光り出した」同じく原文は、

\*

" I do remember that in the great and boysterous storme of this foule weather, in the night there came upon the top of our maine yard and maine mast a certaine little light, much like unto the light of a little candle, which the Spaniards call the *Querpo Santo*, This light continued aboard our ship about three houres, flying from maste to maste, and from top to top; and sometimes it would be in two or three places at once."

\*

「一七〇四年板暴風誌 (History of Storms) 等を引いて、俗信に此火一つ現ずれば風浪の兆(兆)、二つ相近(兆)ついで出ずれば晴天の徴と云ふ。或は云く、此火五つ群がり出れば風浪將に息まんとするを示す。葡人「やぶちやん注：ポルトガル人。」これを救世主の頸コルネ・キリシタンと名くと。」同じく原文は、

\*

： When thin clammy vapours, arising from the salt water and ugly slime, hover over the sea, they, by the motion in the winds and hot blasts, are often fired ; these impressions will oftentimes cleave to the masts and ropes of ships by reason of their clamminess and glutinous substance and the mariners by experience find that when but one flame appears it is the forerunner of a storm ; but when two are seen near together, they betoken fair weather and good lucke in a voyage. The naturall cause why these may foretell fair or foul weather, is, that one flame alone may forewarn a tempest, forasmuch as the matter being joynd and not dissolved, so it is like that the matter of the tempest, which never wanteth, as winds and clouds is still together and not dissipate, so it is likely a storm is engendering ; but two flames appearing together, denote that the exhalation is divided, which is very thick, and so the thick matter of the tempest is dissolved and scattered abroad by the same cause that the flame is divided : therefore no violent storm can ensue, but rather a calme is promised." *History of Stormes*, 1704, p. 22.

\*

である。

「古ローマのプリニウスの博物志 (Historia Naturalis) 卷二の三七章に此火を説いて云く、……」プリニウスの「博物誌」第二卷三十七章には、以下のように記載する(所持する平成元(一九八九)年雄山閣刊の中野定雄他訳になる第三版「プリニウスの博物誌I」から引く)。前の三十六章も親和性が強いので一緒に掲げておく。訳者注は私の既注や熊楠の叙述とダブるが、載せておく(但し、ブラウザの不具合を考えて引き上げ、さらに改行を早くしてある)。

《引用開始》



## 星の軌道逸脱

三六 また星があちらこちらへ飛ぶように見えることがあるが、これは間違いなくその方角から大暴風が起る凶兆である。

### 「カストル星」について

三七 星はまた海にも陸にも出現する。わたしは輝く星のようなものが、夜間墨壁の前で歩哨に立っている兵士の槍にくっついていてのを見たことがある。また、航海中星が声に似た音を立てて、帆船やその他の部分に下りて、鳥のように止り木から止り木へと跳ぶのを見た。こういう星が単独で来るようなことがあれば、それはひどく重くて船を破壊する。そしてもしそれが船倉にでも落ちれば船を全焼させる。そういう星が二つあれば、それは安全のしるしで、航海成功の前触れだ。そしてそれらが近づくとヘレナと呼ばれる恐ろしい星を追い払うということだ。そういうわけで、それらはカストルとポルクス（注1）と呼ばれ、人々は神神のようにそれらに航海の安全を祈る。それらはまた夜間人間の頭の周りで輝くことがあるが、これはたいへんな凶兆だ。これらはすべてはつきりした説明ができないもので、それらは壮大な自然の中に隠されているのだ。

注1 カストルとポルクスはゼウスとレダの息子。

カストルは戦争の術に、ポルクスは拳闘の技にすぐれていた。一説ではゼウスは二人を天上の双生児として星座の中においたという（双子座のカストル屋とポルクス星）。なお、ヘレナは二人の姉妹。

### 《引用終了》

「悌心」兄弟愛。「悌」は「兄弟の仲がよいこと」を言う。

「眞」[お]き「置」の字に同じ。

「一九〇八年板サイトツフェルトの希臘羅馬考古辭典英譯 A Dictionary of Classical Antiquities, 百九四頁」ドイツの古典哲学者（ローマの劇作家プラウトゥスを専門とした）オスカー・サイフェルト（Oskar Seyffert 一八四一年～一九〇六年）の著。版の近い一九〇一年版のものを「Internet archive」で見たが、兄弟のことが記されてあった。[こちら](#)。

## 二

田邊の絲川恒太夫てふ老人中年迄熊野諸村を毎度行商した（郷研究一卷三號一七四頁参照）。この翁今年七十五。廿七八歳の時新鹿村の湊に宿す。湊川の上に一里餘續ける淺谷てふ谷有り。其と竝んで、二木島片村曾根と續く谷有り。此二谷間の山を古來天狗道と呼び懼るゝも、誰一人天狗を見た者無し。絲川氏湊に宿つた夜大風雨で屋根板飛び、其

壓えに置いた大石墮下るを避けん爲、古胴著等を被り、鴨居の下に頭を突つ張り柱を抱き立て居た。家主老夫婦は天井張つた三疊の室に栢籠る。老主人の甥羽島に住む者、茶の木原に住む従弟を訪ひ、裸に成り禪の上に帯しめて、川二つ渡り來り著いたは夜二時也、曉に及び風漸く止んだ。二人大闇黒中 件の山上を大なる炬廿ばかり列なり行くを見て、始めて昔も斯る事有つた故天狗道と名けたと曉つたと云ふ。

「やぶちゃん注…この話と続く次の段の話は、何んと！ 巨匠泉鏡花の未完の無題遺稿の中に、本書の本篇に基づいたとして語りが出てくる！ このために、ブログ横書版、及び、サイト版縦書 PDF 縦書版を作っておいたので、是非、読みたい。

「絲川恒太夫」詳しい事績は知らぬが、他の記事にも登場し、南方熊楠の紀州民俗の情報的重要な提供者であったようだ。

「新鹿村」三重県南牟婁郡にあった旧村。現在の熊野市の東部、紀勢本線新鹿駅・波田須駅の周辺に相当する。この附近（グーグル・マップ・データ）。

「湊」「湊川」「淺谷」[国土地理院図のここ](#)でやっと発見した。現在の新鹿町の沿岸部に「湊」の地名が見え、そこから北から流れる川が「湊川」であり、その川上が分岐したその北部分に「淺谷越」という四百九十八メートルのピークが判る。現在も非常に山深いところである。

「二木島」[国土地理院図のここ](#)を見られたい。「片村」は不明だが（或いはこの「片村」は位置的見て、現在の三木島町の東海浜の「二木島里町」かも知れない）、「二木島」は現在の二木島町で、先の湊川の下流から「熊野古道」を東へ登ると、「二木島峠」を経て「二木島町」、そこから古道をさらに東北に登ると、「曾根坂」があつて、地図を北東へずらすと「曾根町」が見える。

「羽島」不詳。

「茶の木原」この名は三重県四日市市水沢町（すいざわちよう…グーグル・マップ・データ）に冠山茶の木原があるが、話にならないほど離れるから違う。前の羽島とともに識者の御教授を乞うものである。」

斯様の時は小さな火も大きく見ゆるは、熊楠、先年西牟婁郡安堵峯下より坂泰の巔を踰えて日高郡丹生川に著き憩ひ居たるを、安堵の山小屋より大勢捜しに來るに提燈一つ點せり。其が此方の眼には炬火數十本束ね合せて燃すほど大きく見えた。されば右述天狗の炬も實はエルモ尊者の火だらう。一九の善光寺道中續膝栗毛九に、彌次と北八が天狗を悪口するうち、火繩が高き樹の上に飛揚り、今迄吸殻ほどの火が忽ち松明大となり、風も無きに樹の枝ざわざわ鳴出す事有り。戯作ながら、是も山中にエルモ尊者の火現ずる由を傳聞して書いたであらう「やぶちゃん注…ママ。「の」の脱字か」。一九〇六年板、レオナード少佐の下ニゲル及其諸民族四八六頁に、藪榛中の高樹上に夜分大なる火出で燃ゆるを、翌朝見るに焼け居らぬ事有り、土人之を妖巫其樹下に集り踊ると信ずと見え、英領中央亞非利加でも、妖男巫空中を飛ぶ時大なる羽音して樹梢に留まり行く、その携ふる火遠方より見得るが人近づけば消して了ふと云ふ（ワーナー

英領中央亞非利加土人一九〇六年板八八頁)。何れも天狗の炬に似た事だ。

「やぶちゃん注」安堵峯」和歌山県と奈良県の県境にある安堵山(あんどさん) 国土地理院図)。標高は千百三十四メートル。

「坂泰の巔」この附近の孰れかのピーク(国土地理院図)。

「丹生川」この附近(同前)。

「善光寺道中續膝栗毛」十返舎一九が享和二(一八〇二)年から文化一一(一八一四)年にかけて初刷した「東海道中膝栗毛」の大ヒットを受けて書いた、弥次喜多蓀栗毛物の続編内の一つ。文政二(一八一九)年初刷。熊楠が、この部分を語っているところを、泉鏡花は前に示した遺稿の中で、作中人物を借りて高く評価している。

「一九〇六年版、レオナード少佐の下ニゲル及其諸民族四八六頁」アメリカの地質学者アーサー・グレイ・レオナルド(Arthur Gray Leonard 一八六五年〜一九三二年)の『The Lower Niger And Its Tribes』[Internet archive] のうち及び同年版原本で当該箇所が視認出来る。ニジェールの民俗誌。

「藪膝中」このルビは「小森の内」で、「雑木林の中」の意。  
「ワーナー英領中央亞非利加土人(ゼ・ネチウス・オヴ・ブリツシユ・セントラル・アフリカ)一九〇六年板八八頁」オーストリア生まれの女性で、アフリカ研究者であり、作家・詩人でもあったアリス・ワーナー(Alice Werner 一八五九年〜一九三五年) 彼女はスワヒリ語とバントゥー語に堪能であった)の『The Natives of British Central Africa』(「イギリス領中央アフリカの先住民族」は一九〇六年刊。同じく[Internet archive] のこちら及び同年版原本で当該箇所が視認出来る。]

エルモ尊者の火が多く風浪中の舟人の眼に付いて、海中の龍の所爲と想はれたは自然の成行で、其上既に慈覺大師の行記から例示した通り、山にも龍宮有りとする處も有り、龍が塔を守ると云ふ寺も有るから、山上や塔の頂に現ずるエルモ尊者の火をも龍燈と呼んだらう。龍が塔を守る例は經中に少なく無いが、最も奇抜なは三寶感通録一に云く、益州の道卓は名僧なり。隋の大業の初、雒縣寺塔、無人修葺く、纔有下基、卓乃率化四部、造木浮圖、莊飾備矣、塔爲龍護、居在西南角井中、時相有現、側有三池、莫知深淺、三龍居之、人莫敢臨視、貞觀十三年、三龍大鬪、雷霆震擊、水火交飛、久之乃靜、塔如本、住人皆龍拾取毛、長三尺許、黃赤可愛《雒縣の寺塔、人の修葺する無く、纔かに下に、基、有るのみ。卓、乃ち四部を率化し、木の浮圖を造り、莊飾、備はれり。塔は龍に護られ、西南の角に在る井の中に居せり。時に相の現ずる有り、側に三池有り、深淺、知る無し。三龍、之に居るも、人、敢へて臨み視ること莫し。貞觀十三年、三龍、大いに鬪ひ、雷霆震ひ撃ち、水・火、交に飛ぶ。之れ、久しくして、靜まり、塔、本のごとし。住人、皆龍の毛を拾ひ取るに、長さ三尺ばかり、黃赤にして愛すべし。吾邦に貴人の三婦嫉妬で亂闘して三目錐の名を獲た話があるが、是は又正法護持の爲に佛塔を守る三龍が毛を落とす迄混戦したのだ。根來の大塔焼けた時、龍が水を吐いて防いだ事、紀伊國名所圖會に

畫添へて出し有る。

「やぶちゃん注…「三寶感通録」「一」で既出既注。

「率化」教導すること。

「浮圖」「浮屠」「佛圖」とも書く。中国で、仏教伝来から南北朝時代にかけて「仏陀」又は「仏塔」を呼ぶのに用いた言葉。サンスクリット語の「ブツダ」の音写、或いは「ストゥーパ」の誤った音写とされる。「仏陀」を意味する用法は、史書などに見いだされるものの、仏教徒の間では避けられ、「仏塔」を意味する用法は、漢訳仏典の中にもしばしば見られる。但し、中国における仏塔は、「三層浮圖」とか「九層浮屠」と書くように、重層型の仏塔を指すことが多かった(平凡社「世界大百科事典」に拠った)。

「貞觀十三年」六三九年。唐の太宗の治世。

「貴人の三姉妹姪で亂闘して三日錐の名を獲た話」出典不詳。識者の御教授を乞う。

「根來の大塔」和歌山県岩出市にある真言宗一乘山根來寺。「大塔」は正式には「大毘盧遮那法界体性塔」と呼び、現在、国宝。本尊は胎藏大日如来で、高さ四十メートル、幅十五メートル。木造では日本最大の多宝塔(二重塔で初層の平面が方形を成し、上層の塔身が円形に造られたものを言う)である。文明一二(一四八〇)年頃から建築が始まり、半世紀以上経た天文一六(一五四七)年頃に竣工したと考えられている(当該ウィキに拠った)。[ここ](#)(グーグル・マップ・データ)。

初最初龍燈は皆天然生の火だったが、後には衆心を歸依させる爲、龍燈や舍利光佛光を僧侶が祕する方術を以て出す事と成つたは疑を容れず。現今も印度や西藏の僧は、室内に皓月眞に逼れるを出したり、空中に神燈炫耀するを現じたり、中々歐洲の幻師の思ひも奇らぬ事を仕出かすと、毎々其輩から聞いた。付法藏因縁傳五に、馬鳴大士、一祖富那奢に議論で負けて弟子と成つたが、心猶愧恨みて死せんと欲す。富那奢之を察知し、馬鳴をして闇室中に經典を取らしむ。闇くて取れないと言ふと、師告らく、但去、當令汝見、爾時尊者即以神力、遙伸右手、徹入屋内、五指放光、其明照曜、室中所有、皆悉顯現、爾時馬鳴心疑是幻、凡幻之法、知之則滅、而此光明轉更熾盛、盡其技術、欲滅此光、爲之既疲、了無異相、知師所爲、即便摧伏《但だ、去け。當に汝をして見しむべし。爾に尊者、即ち、神力を以つて、遙かに右手を伸べ、室内に徹し入る。五指、光を放ち、其の明り、照り耀き、室中に有る所のもの、皆、悉く顯現す。爾に、馬鳴、心に『是れ、幻しならん。』と疑ふ。凡そ、幻の法は、之れを知れば、則ち、滅す。而るに、此の光明は轉更に熾盛なり。其の技術を盡して、此の光を滅せんと欲するも、之れが爲に既に疲れ、了に、異相、無し。師の爲す所なるを知りて、即ち、摧伏す。其から懸命に勉強して遂に佛法第十二祖と迄成つたと出づ。此文を見て當時方術で指端に光を出した事有つたと知る。辟支佛や羅漢が、人を教化したり身の潔白を託するに口辯を用ひず、黙りて身體から火光を出した例は頗る多い。何か其祕術が有つのだらう。

「やぶちゃん注…「炫耀」光り強く輝くこと。

「付法藏因緣傳」釈尊の入滅後、付法相伝した二十三祖師の因縁を叙述したもの。全六巻。北魏の吉迦夜・曇曜共訳で四七二年成立とされるが、サンスクリット語からの訳本ではなく、口伝による作成らしい。特に天台宗・禅宗では、古来、尊重されている。「大蔵経データベース」で調べたが、導入のシークエンスは少し長く、熊楠が内容を簡約している。以下が、当該部。

\*  
有一大士名曰馬鳴。智慧淵鑒超識絕倫。有所難問靡不摧伏。譬如猛風吹拔朽木。起大憍慢草芥群生。計實有我甚自貢高。聞有尊者名富那奢。智慧深邃多聞博達。言諸法空無我無人。懷輕慢心往詣其所。而作是言。一切世間所有言論。我能毀壞如電摧草。此言若虛而不誠實。要當斬舌以謝其屈。富那奢言。佛法之中凡有二諦。若就世諦假名爲我。第一義諦皆悉空寂。如是推求我何可得。爾時馬鳴心未調伏。自恃機慧猶謂己勝。富那語曰。汝諦思惟無出虛語。我今與汝定爲誰勝。於是馬鳴卽作是念。世諦假名定爲非實。第一義諦性復空寂。如斯二諦皆不可得。既無所有云何可壞。我於今者定不及彼。便欲斬舌以謝其屈。富那語言。我法仁慈不斬汝舌。宜當剃髮爲吾弟子。爾時尊者度令出家。心猶愧恨欲捨身命時富那奢得羅漢道。入定觀察知其心念。尊者有經先在闇室。尋令馬鳴往彼取之。白言大師。此室闇冥云何可往。告曰、

\*  
「馬鳴大士」(生没年不詳)は一〇二世紀頃の中インド出身の仏教論師。サンスクリット名「アシュバゴーシャ」の漢訳。仏教音楽・仏教文学の創始者の存在とされ、仏陀伝の傑作「ブツダチャリタ」(「仏所行讚」)を作った。「大乘起信論」の作者とされる馬鳴が居るが、これは後世の別人と考えられる。三十の頃、「大乘起信論」を読んだが、読み終わるのに一ヶ月もかかったのを思い出した。

「富那奢」脇比丘(二世紀初頭の中インドの僧。脇尊者とも呼ぶ。サンスクリット名は「パールシュヴァ」。付法藏第九祖。カニシカ王の下で、彼以下五百人の比丘がカシユミールで第四回の仏典結集を行い、「大毘婆沙論」(小乗仏教教理の集大成。全二百巻)を編纂したとされる人物)に師事して法を受け、主に小乗教を弘めて多くの衆生を教化した。

「摧伏」本来は他動詞的で「打ち挫いて屈伏させること」を言う。  
「辟支佛」「各自独りで悟った者」の意の「プラティエーカ・ブツダ」の漢訳。仏の教えに拠らず、自分自身で真理を悟り、その悟りの内容を人に説くことをしない聖者を指す。「独り悟りを開いてそれを楽しむ仏」で、「独覚」とも意訳する。また、十二因縁の理法を悟るところから、「縁覚」とも訳したが、これはどうも「プラティエーカ」(「独りの」の意)を「プラティヤヤ」(「縁」の意)と誤読したか、あるいはこの聖者が十二因縁を観ずる修行をして覚ったとされることを特に言ったためかとも考えられている。現行では「縁覚」の方が使用度が高い。」

續高僧傳十に、周の太祖の時、西域獻佛舍利《西域より佛舍利を獻ず》、帝、僧道妙を

して供養せしむるに、經于一年、忽於中宵、放光滿室。螺旋出窻、漸引於外、須臾光照四遠、騰扇其焰。照屬天地、當有見者、謂寺家失火、競來救之、及觀神光乃從金瓶而出、皆歎未曾有也。《一年を経て、忽ち、中宵に、光を放ち、室に滿つ。螺旋して窻を出で、漸と外に引びて、須臾にして、光、四遠を照らし、其の焰を騰し扇ぎ、天地に照り屬る。當に見る者有りて、「寺家、失火す。」と謂ひて、競ひ來たりてこれを救ふに、神光、乃ち金瓶より出づるを觀るに及び、皆、「未だ曾て有らず。」と歎ず。》。十四に、隋の文帝舍利を梓州華林寺に送らしむ、既至州館、夜大放光、明徹屋上、如火焰發、食頃方滅《既して州館に至るに、夜、大いに光を放ち、屋の上、明るく徹りて、火焰の發するがごとし。食頃して方に滅す。》。三寶感通錄二、梁武帝同奉寺に幸し、始到瑞像殿、帝纔登階像大放光。照竹樹山水並作金色。遂半夜不休《始めて瑞像殿に到る。帝、纔かに階に登れば、像、大いに光を放ち、竹樹山水を照らし、並に金色を作し、遂に夜半まで休まず。》。

「やぶちゃん注…『續高僧傳十』調べたところ、これは『續高僧傳』の卷第八の誤りである。『CBETA 漢文大藏經』（中文）のこちら、[0486a18]の四行目以降を見られたい。」

「十四に隋の文帝舍利を梓州華林寺に送らしむ、……」これも調べたところ、『續高僧傳』の卷第十二の誤りである。『維基文庫』版の同卷の「唐京師淨影寺釋善胄傳九」の丁度、真ん中の部分に出現する。」

慈恩傳四に、玄奘天竺に在つた時、西國法、以此（正）月、菩提寺出佛舍利、諸國道俗咸來觀禮《西國の法、此の（正）月を以つて、菩提寺、佛舍利を出だし、諸國の道俗、咸來たりて觀禮す。》玄奘、其師勝軍居士と共に往き見る、至夜過一更許、勝軍共法師、論舍利大小不同云々。更經少時、忽不見室中燈、内外大明、怪而出望、乃見舍利塔、光暉上發、飛燄屬天、色含五彩、天地洞朗、無復星月、兼聞異香氤氳溢院、於是、遞相告報言、然始總入、天地還闇、辰象復出、衆觀此已、咸除疑網。《夜、一更ばかりを過ぐるに至り、勝軍、法師と共に、舍利の大小の不同を論ず云々。更に少時を経て、忽ち、室中、燈を見ざるに、内外、大いに明るし。怪しみて、出でて望めば、乃ち、舍利塔より、光暉、上り發し、飛燄、天に屬り、色は五彩を含み、天地、洞朗として、復た、星・月の無きを見る。兼せて、異香、氤氳として、院に溢るるを聞く。是に於いて遞ひに相ひ告げ、報じて言はく、「舍利に大神變有り。」と。諸衆、乃ち、知り、重ねて集まりて禮拜し、「希有なり。」と稱歎す。食頃、經ちて、光、乃ち、漸く收まり、餘り盡きんと欲るに至り、覆鉢を遶ること、數匝りし、然して始めて總て入れり。天地、還、闇く、辰象、復た出づ。衆、此れを觀て、咸、疑網を除く。》續高僧傳四には彼土十二月三十日、當此方正月十五日、世稱大神變月、若至其夕、（舍利）必放光瑞、天雨奇花。《彼の土の十二月三十日は、此方の正月十五日に當たり、世に「大神變月」と稱す。若し、その夕べに至れば、（舍利）必ず、光瑞を放ち、天、奇花を雨らす。》其夜、玄奘其師と對話する内、忽失燈明、又觀所佩珠璫瓔珞、不見光彩、但有通明晃朗、内外洞然、而不測其由也、怪斯所以、共出草廬、望菩

提樹、乃見有僧手擎舍利、大如人指、在樹基上、遍示大衆、所放光明、照燭天地、于時衆鬧、但得遙禮、雖目覩瑞、心疑其火、合掌虔跪、乃至明晨、心漸萎頓、光亦歇滅、居士問曰、既覩靈瑞、心無疑耶、奘具陳意、居士曰、余之昔疑、還同此也、其瑞既現、疑自通耳《忽ち、燈明を失す。復た佩ぶる所の珠璫・瓔珞を見るに、光彩を見ず、但だ、通明して眺朗、内外、洞然たる有り。然して其の由を測れず。斯の所以を怪しみ、共に草廬を出でて、菩提樹を望むに、乃ち、僧、有りて手に舍利を擎ぐるを見る。大いさは人の指のごとし。樹の基の上に在りて、遍く大衆に示し、放つ所の光明は、天地を照燭す。時に衆鬧しく、但だ、遙かに禮するを得るのみ。目に瑞を觀ると雖も、心に其の火を疑ふ。合掌し、虔んで跪き、乃ち、明くる晨に至る。心、漸く萎頓れ、光も復た、歇き滅す。居士、對いて曰はく、「すでに靈瑞を觀る、心に疑ひ無からんや。」と。奘、具に意を陳ぶ。居士曰はく、「余の昔の疑ひも、還た此れに同じなり。其の瑞、既に現じたれば、疑ひ自ら通ずるのみ。」と。》

「やぶちゃん注」・「慈恩傳」「大慈恩寺三藏法師傳」。三藏法師として知られる唐の玄奘（六〇二年～六六四年）の伝記。全十巻。唐の慧立の編になる。「大藏經データベース」で正規本文を確認・補正した。

「洞朗」 広々として明るいさま。

「氛氲」 気の盛んなさま。

「覆鉢」 相輪などの露盤上にある、鉢を伏せたような形のもの。その上に請花（うけばな）・九輪などをのせる。「デジタル大辞泉」の画像を参照されたい。

「辰象」 ここは月や星のこと。

「珠璫」 宝珠。

「眺朗」 明るく輝くさま。

「洞然」 盛んに燃えるさま。」

此珍事は西域記には出て居なかつたと記憶するが、玄奘の弟子が書いた慈恩傳には、一同此瑞光を觀て疑網を除いたと有るに、道宣が親しく玄奘から聞書した續高僧傳を案ずると、遠方から禮し得たと云ひ、目に光を見ながら心其を火たるかと疑うたと云ひ、玄奘が充分其瑞光たるを信ぜぬに、勝軍が、予も昔汝の如く疑うたが、實際見た上は疑ふに及ばぢや無いかと様々論じたなど、随分怪しいことで、ビールの慈恩傳英譯に此處を註して、其頃印度既に斯る信教上の詐騙行はれたを此文で知り得ると有るが、氏が件くだむの續高僧傳の文を見たなら一層其然るを知り得た筈だ。此玄奘はルナンが言つた通り、佛を奉ずる事篤き餘り奇瑞神異な事は味憎も糞も信じた人なるに、猶舍利光を目撃しながら其を火で無いかと疑うた由、後年道宣に話した所から推すに、此光は大仕掛の人工で出したものに相違ない。

「やぶちゃん注」・「ビールの慈恩傳英譯」イギリスの東洋学者で、最初に初期仏教の記録類を中国語から直接翻訳したサムエル・ビール (Samuel Beal 一八二五年～一八八九年)。

よく判らないが、死後の一九一一年刊の『*The Life of Huen-Tsang*』(「玄奘の生涯」) 辺りに含まれるか。[「Internet archive」のごちふに一九一四年版があるが、](#)流石に探す気にはならない。悪しからず。

「ルナン」フランスの宗教史家ジョゼフ・エルネスト・ルナン (Joseph Ernest Renan 一八二三年～一八九二年)。近代合理主義的な観点によって書かれたイエス・キリストの伝記「イエス伝」(*Life de Jésus* : 一八六三年) の著者として知られる。】

エルサレムの聖墓に、毎年聖土曜日(三月下旬にあり)天より神火降り、詣衆押合うて大混雑中に其火を移し點じ、持歸つて舊火を更む。其時一番に新火を移し點した者を大吉と羨む事、備前西大寺の會式の如く、此火點した蠟燭の蠟で十字を畫いた經帷子を著せて死人を埋むれば、樂土に往く事受合也と云ひ、其他種々の吉祥ありとす(一八四三年フライントン板ピエトロ、デラ、ヴァレ紀行一卷二九五頁)。此夜信心の輩、夫妻打連れて聖墓を取廻せる圓堂に集り秘密の事を行ひ、斯て孕む所の子身完全なりと信ず。翌朝其迹を見るに、口筆述難き體たらくだ(ゴダール埃及巴列斯丁)、一八六七年板、三八七頁)。ピエトロ此式を見た時既心有る者は、昔は眞の天火が降つたが當世のは人作だと云つた。然るに、近時に至る迄僧輩依然其人作に非るを主張し、當日法主、脱衣露頭跣足して身に一物を仕掛けざるを示し、單衣墓に入つて神火忽ち出づ。其體手品師の箱改めに異ならず、ある説に、墓内の秘部に數百年點し續けた晶燈あり、法主其から聖火を拵へ出すと。又云ふ、何の事は無い、マッチを藏し置いて火を作るのだと。希臘教で此式を廢すると、聖週七日にエルサレムへ巡禮する最富の徒の半分が來なくなり土地衰微すべしと一八七五年板バートン夫人の西里亞巴列斯丁並聖地内情卷二、頁一〇に説き居る。

「やぶちゃん注」：「備前西大寺」「日本三大奇祭」の一つともされる「会陽」＝「裸祭り」で知られる岡山県岡山市東区西大寺にある真言宗金陵山西大寺(さいだいじ…グーグルマップ・データ)。

「一八四三年フライントン板ピエトロ、デラ、ヴァレ紀行一卷二九五頁」『[「南方隨筆」版南方熊楠「詛言に就つ」オリジナル注附\(4\)」](#)の私の注の冒頭にある「Viaggi di Pietro della Valle, Brighton, 1843」を参照されたい。

「ゴダール埃及巴列斯丁」(一八六七年板、三八七頁)、フランスの医師・人類学者であったエルネスト・ゴダール (Ernest Godard 一八二六年～一八六二年) の一八六七年発表の『*Egypte et Palestine: observations médicales et scientifiques*』(「エジプトとパレスチナ―医学的・科学的觀察」) 『[「Internet archive」](#)で同年版の原本が視認出来る。』

本論斯う長く成て南方先生も三升五合ばかり欲しく成り、讀者諸君も倦んで來たゞらうから、中入りに實曆の椿譚を述べんに、予が現に此文を草する所は學問に最も適した閑靜な地所の隅の炭部屋だが、其横町は夜分至て淋しく、數年前まで特種民「やぶち



ゃん注…差別用語なので批判的に読みたい。」が芝居見に往つた還りがけに、勿體無くも子が人天を化度せんと寂想に耽りおる壁一つ隔てゝ、行き掛の駄賃に大便を垂れ置く事毎度なれば、人呼んで糞横町と做す。然るに一夏連夜餘り暑さに丸裸に成つて庭に立ち天文を察し居ると、壁外に芝居歸りの特種殿原喧々囁々するを妻が怪んで立聴くと、町を隔つた鄰家の庭に密生した「まさき」の大木の上に、幽霊と兼て古くより噂有る火の玉が出て居ると云ふのだ。不審甚しくて、其輩立ち去た後、妻を彼輩の蹟に立たせ色々試し見ると、「何のこつちや阿呆らしい、火の玉で無うて傘丸でんす」と田邊詞で吐すから子細を聞くと顕微鏡を夜見るとてランプの周邊を闇くし、一方に喇叭のような紙筒をあてた口から光が強く彼「まさき」の上の方に向ひ出た。燈と木との間に予が裸で立って天文を考へおる股と陰囊の影が彼の樹の枝葉間に髣髴と映つたが幽霊の正體で、佐青有公の提燈たる人魂と擬ひしは、先尅降つた雨の餘滴が此方の光を反射するのと判つたので、予も陰囊の序に龍燈で無くつて龍をも出して映さうかと苦笑した事だつた。其から氣が付て種々自宅で試験の末、樹の位置葉の性質に随つて、尋常のランプや蠟燭の火でも一寸龍燈様の物を出かし得、其が餘り近づくと思えず適宜に遠ざかるとよく見えるを知つた。上にワナーの著や三寶感通録二から引いた妖男巫の火や簡州の神燈が、遠方から見ゆるに近方から見えぬと有るも似たことで、何に致せ暇少ない吾輩さへ、不慮に陰囊の影から此だけの發明をした位故、俗信を起し固むる方便に永代苦辛した佛僧中には、種々の機巧や材料もて龍燈舍利光佛光を現出しり、又ヨングハズバンドが觀た燈巖如き天然に異光を發する場所を見出した者少なく無かつたと知らる。

「やぶちゃん注…南方熊楠自身が知らぬうちに現出させた「金玉龍燈」という、この実話まことに面白い。「龍燈」の思いもしなかつた光学実験の契機が彼の傘丸だったというのは、実に臭ってくるほどにリアルなものである。文字通りの「チンたん」でげすな！熊楠先生！なお、最終一文の「見出」は底本では「現出」（左ページ二行目）であるが、これは文脈を検討して「選集」の方を採用した。

なお、以下の段落は、底本では全体が一字下げである。」

序に言ふ。昔波斯のケルマン州の汗が、拜火教徒の尊奉する聖火堂に押し入つて、其聖火を見るに尋常の火だつたので、悪言して其火に唾を吐くと、火が穢を怒つて白鳩と化つて飛び去つたので、僧共不信の汗に聖火を觀せたのを悔過し、信徒と共に祈禱し又大施行をすると、白鳩復り來つて再び聖火と現じた（タヴェルニエー汝斯紀行、一六七六年板四三九頁）。尾芝君が越後野志より引かれた、八海山頂の神に山麓で捧げた火が飛び行く話に似た事で、火が心有つて自ら飛び行くのか、神が靈驗以て火を動かすのか、孰れにしても全く虚構の言か、多少斯の様な自然現象有るか、見る人一同精神錯誤に陥つたのか、又は何かの設備で斯る手品を現する法が有つたか、四つの一つを出でじ。

「やぶちゃん注…「タヴェルニエー汝斯紀行」フランスの宝石商人にして旅行家であつたジャン＝バティスト・タヴェルニエ（Jean-Baptiste Tavernier 一六〇五年～一六八九年）

は、一六三〇年から一六六八年の間にペルシャとインドへの六回の航海を行っており、諸所の風俗を記した。その著作は、彼が熱心な観察者であり、注目に値する文化人類学者の走りであったことを示している。彼のそれらの航海の記録はベスト・セラーとなり、ドイツ語・オランダ語・イタリア語・英語に翻訳され、現代の学者も貴重な記事として、頻繁に引用している（[英文の彼のウィキに拠った](#)）。以上は、*Joyages de Perse* となるが、彼が *Les six voyages de Jean-Baptiste Tavernier* 中のペルシャ部分か。[「Internet archive」に](#)は、[英訳版の「Travels through Turkey to Persia」ところがある](#)。

「尾芝君が越後野志より引かれた、八海山頂の神に山麓で捧げた火が飛び行く話」『[尾芝古樟（柳田國男）「龍燈松傳説」を参照されたい。](#)』

上に出した眼目山の山燈龍燈は毎七月十三夜、九世戸の天燈龍燈は正五九月と毎月の十六夜、三學山寺の神燈は大齋の夜多く出で、玄奘が目撃した菩提寺の舍利光は印度の大晦日（支那の上元の日）、エルサレムの神火は聖土曜日と云ふ風に、出る時が定（きま）ており（尾芝君の文、二〇七頁参照）、續高僧傳二六に、五臺山南佛光山寺の佛光は華彩甚盛、至夏大發、昱人眼目《華彩、甚だ盛んにして、夏に至りて大いに發し、人の眼目に昱（あ）かなり。》とある。天主教のシメオン尊者は紀元四六二年に六十九で圓寂したが、四十七年の長い間高さ五十四呎（フィート）の柱の尖に徑三呎の臺を造り、其上で行ひ澄（すま）した難有い聖人ぢやつたと有るが、あのそれ川柳とやらに「大佛の××の長さは書落し」の格で、大小便をどう始末したと肝心の事を傳へて居無い。或人終日視察すると右の柱上臺で朝から暮迄額を踵（かかと）に加へて跪拜千二百四十回したが、南方先生同前無類の女嫌ひで、若い時遁世してから一向會（あ）なんだ老母が、命の有る内に一度會はんと來たのを會はずに卻（か）した一方に入らぬ處へ大悲を垂れて、曾て瘡（かさ）を生じた中に蛆生じたのを大切に養育し、蛆が蚊落（は）ちたのを飯運びに來た弟子して瘡中へ拾（ひろ）入れさせたとは不屈きな聖人ぢや。その永年苦行した一柱觀は今に安息城近傍に存し、難有屋連（ありがたやん）これを渴仰するが、毎年正月五日其柱上に一大星輝くを見ると云ふ（一八二二年板、コラン、ド、プランチーの遺寶（テフレンヨール・クリチク・デー・レリック・エ・デー・イ・マージ・ミラクロス）靈像評彙 三卷八九一九〇頁）。

「やぶちゃん注」『尾芝君の文、二〇七頁参照』『[尾芝古樟（柳田國男）「龍燈松傳説」](#)の第五段落「此推測の果して當つて居るか否かを確かめる爲には、第一に龍燈出現の期日の有無を調べて見ねばならぬ。」で始まる部分であろう。

「シメオン尊者」最初の登塔者（正教会で塔に登る苦行を行う修道士のこと）聖シメオン。詳しくは、[ウィキの「登塔者シメオン」](#)を見られたいが、現行では永眠は四五九年七月二十四日とする。

「五十四呎」約十六・五メートル。

「三呎」約九十一センチメートル。

「大佛の××の長さは書落し」の伏字は文脈からすれば、「くそ」か。私なら「まら」としたくなるが。

「一柱観」原本に当たれないので、不詳。

「安息城」同前。

「一八二二年板、コラン、ド、プランチーの遺寶靈像評彙 三卷八九一九〇頁」コラン・ド・プランシー (J. Collin de Plancy 一七九四年或いは一七九三年〜一八八一年或いは一八八七年) はフランスの文筆家。詳しくは当該ウィキを見られたいが、掲げられたものは「*Dictionnaire critique des reliques et des images miraculeuses*」(遺物と奇跡のイメージに関する評論的辞書「一八二二年刊」)。

嬉遊笑覽十云く、隴蜀餘聞、蜀金堂縣三學山、有古樹三四株、不記年代、每春月、其葉夜輒有光、似炬、遠近數百里、以爲佛、裏粮往覽《隴蜀餘聞》に、蜀の金堂縣の三學山に、古樹三、四株有り、年代を記さず。春月毎に、其の葉に、夜、輒ち、光、有り、炬に似たり。遠近數百里、以つて佛光と爲し、糧を裏んで往きて此れを観る。春に限つて光つたのは生理又病理學上説明し得べしと想ふ。吾邦では山茶の朽幹が夜光を放つ事他の朽木より多い。予幼時和歌山城近く山茶屋敷として天方ちふ侍の邸あり。何故か年中戸を閉めず、夜分人通れば天狗高笑するとして其邊行く人稀だつた。熊野には山茶の木の槌つちは怪るとて今に製らぬ所あり。その理由は前日來訪せられたスキングル氏が、本年八月上旬(サンフランシスコ) 港で催す米國科學獎勵會で代讀さるる予の論文で公けにする筈だが、嬉遊笑覽に云へる通り、朽木が光を發する事も山茶を怪木と云ふ理由の一つに相違ない。

(大正四年十月郷研第三卷八號)

「やぶちゃん注・最後のクレジット附初出は最終行の下方にインデントされているが、ブラウザの不具合を考えて改行し、引き上げた。

「嬉遊笑覽」国学者喜多村信節(のぶよ)(天明三(一七八三)年〜安政三(一八五六)年)の代表作。諸書から江戸の風俗習慣や歌舞音曲などを中心に社会全般の記事を集めて二十八項目に分類叙述した十二巻付録一卷からなる随筆で、文政一三(一八三〇)年の成立。この部分には困らされた。まず、「選集」はこの巻数を底本の「十一」を『一〇』に修正している。当該部を所持する岩波文庫版第五巻(長谷川強他校注・二〇〇九年刊・新字)で調べたところ、「巻十下目録」で「夜光木」とあるので、ここにあるに違いないと、当該部を見たところ、ところがどっこい、ない。三度、「巻十」を縦覧したが、ない。しかし、ここになければおかしいと思い、「或いは、底本が違うかも?」と、[国立国会図書館デジタルコレクションにある昭和七\(一九三二\)年\(五版\)成光館出版部刊の当該部を視認したところ](#)、あった! 左ページの二行目である。一部、読点がおかしいが、これだ! しかも漢文ベタの後には「此は」、「つはき」(樁)「の光る類とみゆ」という解釈も添えられている。

「隴蜀餘聞」清の王士禛撰。全一卷。隴・蜀の地誌。原影印本を「[中國哲學書電子化計劃](#)」のこちらで確認出来る。

「スキングル氏」アメリカ合衆国の農学者・植物学者ウォルター・テニソン・スウィングル (Walter Tennyson Swingle 一八七一年〜一九五二年)。アメリカ農務省などで働き、柑

橘類・果樹の品種改良・柑橘類の分類学研究などで知られる。詳しく（もないが）は当該ウィキを参照されたいが、所持する「南方熊楠を知る事典」（松居竜五・月川和雄・中瀬喜陽・桐本東太編／一九九三年四月講談社現代新書刊）の人名解説での松居氏の記載を引用する。

#### 《引用開始》

米国の農業植物学者。農務省に勤務していた。一九〇六年、南方熊楠に手紙を送り、ジャクソンヴィルで採集した菌類を送ってほしいと求めた。その後、文通による付き合いが続き、一九〇九年「やぶちゃん注」明治四十二年。」には渡米を要請している。当初、熊楠はこの要請にかなり乗り気であったようだが、結局、家族の事情により断念した。だが、この時の渡米要請の一件が新聞で報道され、熊楠が国内で名声を得るきっかけとなった。スウィングルはまた、熊楠に中国から日本への植物移入の歴史について書くように勧めたりもしている。一九一五年「やぶちゃん注」大正四年。」に来日した折りは、田辺に熊楠を訪ね、数日ともに周辺を遊び、この時、再び渡米の要請をしたが熊楠は断わった。

#### 《引用終了》

「予の論文」不詳。何で光るのかだけでも知りたいな……。」

### 三

諸國里人談三や倭漢三才圖會四一に、鷓鴣「やぶちゃん注」ママ。歴史的仮名遣では「五位鷺」であるから、「じゐざぎ」が正しい。」夜飛べば火の如く光ると有り、大和本草には蒼鷺を妖怪とするは夜光るからと云ふ。七、八年前田邊近所岩城山稻荷の神林から、夏の夜粗定つた時刻に光り物低く飛下るを、數夜予も橋上の納涼衆と俱に見た。狩獵に年を積んだ人が彼は蒼鷺が田に餌を求め下るんぢやと言うた。林羅山の説に、夜中に小兒の啼聲の様なる怪を「うぶめ」と名くるを、ひそかに伺ふと青鷺だったと或人語つたとある（梅村載筆天卷）。倭漢三才圖會には、九州海濱に多い鷗の様で夜光る特種の鳥だと有る。伊太利人は鬼火を山のと平野のと二種に分ち、何れも腹部等が螢の如く光る鳥だと信ず。プリニウスの博物志十卷六七章に、獨逸のヘルキニアの林中にその羽夜火の如く光る鳥住むと云ひ、一八八五年板ベントの希臘諸島住記四八頁には、希臘の舟人今もエルモ尊者の火を惡兆を示す鳥が来て橋頭に止る者と做すを以て考ふれば、ユリツセスが航海中ハルピースなる怪鳥に惱されたと傳ふるも、同じくこの火を鳥と見立てたのだらうと述べて居る。ペンナントが十八世紀に出した動物學には、冬鷗、冬中海を去て遠く英國內地の濕原に食を覓む。星彈又は星膠とて膠様の光り物は、其實此鳥等が食つて消化不十分な蚯蚓を吐出したのだと有るが（ハズリツト諸信及俚傳二・六三六頁）、其が本當なら樹梢に吐懸けて光らすこともあらう。

「やぶちゃん注」諸國里人談三」既出。私の「諸國里人談卷之三 焚火（たくひ）」を参照されたい。

「倭漢三才圖會四一」私の「和漢三才圖會第四十一 水禽類 鳩鶻(ごいさぎ)」を見られたい。

「大和本草には蒼鷺を妖怪とするは夜光るからと云ふ」不審。何故なら、「大和本草」にはそんな記載はないからである。国立国会図書館デジタルコレクションの原本で示すと、同書のこちらが「鷺」(総論)の項で、こちらには「五位鷺」の項があるが、孰れにもこれに類する記載はなく、「蒼鷺」の独立項もない(図品部も確認した)。私は思うに、これは直前で述べた「和漢三才圖會第四十一 水禽類 鳩鶻(ごいさぎ)」を熊楠は誤認したのではないかと思う。そこで寺島良安は、

\*  
凡そ、五位鷺、夜、飛ぶときは、則ち、光、有り、火のごとし。月夜、最も明なり。其の大なる者、岸邊に立ちては、猶ほ、人の停立するがごとく、之れに遇ふ者、驚きて、妖怪と爲す。

\*  
と記しているからである。但し、一点、気になることはある。そこで良安は「五位鷺」とし、「蒼鷺」とはなっていないことである。しかも「和漢三才圖會」では独立して「第四十一 水禽類 蒼鷺(アオサギ)」を立項しているが、熊楠の言うような記載は全くないのである。なお且つ、それぞれの私の注を見るまでもなく、ゴイサギとアオサギは別種である。無論、同じサギ亜科 *Ardeinae* で背が青いところは似てはいる。私が気になるのは、熊楠直前で「鳩鶻」と書いて、すぐ、ここでは「蒼鷺」と明記している点である。この錯誤は何に拠ったのか? 気になり出すと、放つてはおけないのが私の性分である。一つ、「これでは?」と思うものを見つけた。人見必大の「本朝食鑑」(医師で本草学者であった人見必大(寛永一九(一六四二)年頃?元禄一四(一七〇二)年・本姓は小野、名は正竹、字は千里、通称を伝左衛門といい、平野必大・野必大とも称した。父は四代將軍徳川家綱の幼少期の侍医を務めた人見元徳(玄徳)、兄友元も著名な儒学者であった)が元禄一〇(一六九七)年に刊行した本邦最初の本格的食食物本草書。「本草綱目」に依拠しながらも、独自の見解をも加え、魚貝類など、庶民の日常食品について和漢文で解説したものである。)の「〈五 水禽〉」にある「五位鷺」の記載である。国立国会図書館デジタルコレクションの当該画像で訓読する(同書は訓点付き漢文。読みは大幅に私が補った)。その「集解」である。傍線は私が引いた。ここでは傍線部の読みは本文内に附した。

#### 五位鷺

釋名「やぶちちゃん注…略す。」

集解 状かたち、蒼鷺(あをさぎ)に似て、小さし。灰白色にして、碧光(へきくわう)、有り。頂たてきに、紅、有りて、毛、冠かんむりのごとし。翠みどりの鬣たてがみ、碧あをの斑まだら、丹にの背はし、青あおき脛はざ、高たかき樹きに巢くくひ、樹こゝれの杪やじに宿やどし、水みづ中に飲のむ。能うく魚うを・鰕えびを捕とらふ。其そのの味あじ、甘かん鹹しんと雖なも、夏なつは、味あじはひ、蒼鷺あをさぎに似て、稍やしか佳よなり。冬ふゆは、臊さう氣き「やぶちちゃん注…腥しんい臭におい。」有りて佳よなら

ず。凡そ、五位、夜、飛ぶときは、則ち、光り有りて、火のごとく、月夜、最も明（あきら）なり。或いは、大なる者、岸邊に立てば、巨人のごとし。若（も）し、人、識らずして之れに遇へば、驚惧（きやうく）し、「妖怪」と爲（な）して、斃（たふ）る。此れ、妖（えう）と爲（す）るに非（あら）ず、人、驚きて妖と爲るなり。或るひとの謂はく、「若し悞（あやま）りて、夜、小兒の衣服を暴（さら）して「やぶちゃん注…取り入れずに干し続けて。」、五位、其の衣の上に糞（くそ）して、人、之れを知（しら）ずして、小兒に著せしめば、則ち、驚啼して止まず、竟（つひ）に奇病を發す。」と。是れ、未だ其の證を詳らかにせず。「やぶちゃん注…以下略。」

\*

私が何故、これを挙げるかというと、「蒼鷺」「五位鷺」「光」「妖怪」の四五が完全に総て含まれており、後半は更なる「妖怪」性の具体例が語られているからである。但し、ご覧の通り、これは「五位鷺」であって「蒼鷺」ではない。しかし、アオサギの方がゴイサギより大きく、私は見かけるたびに、「妖怪」どころか、何時も「沈黙考に耽る哲学者」のように感ぜられて、大好きな鳥なのである。なお、サイト「[tenki.jp](http://tenki.jp)」の『[光る鷺「青鷺火」の真相とは？田園の守り神・鷺のミステリー](#)』の前編がよく書けており、なお、そこにも書かれてある通り、サギ類が発光する理由として発光バクテリアが附着しているからだとする説がまことしやかに語られているのであるが、そのような標本を採取し、示したデータは未だに皆無であり、信ずるに足らない。寧ろ、私は腹部の白さが、僅かな月などの自然光や、遠い街頭・人家の燈火などの人工光を反射させているものと考えている。

「岩城山稻荷」伊作田稻荷（いさいだいなり）神社（グーグル・マップ・データ）。

『うぶめ』と名くるを、ひそかに伺ふと青鷺だったと或人語つたとある（梅村載筆天巻）『三種の写本を縦覧したが、発見出来なかった。

「倭漢三才圖會には、九州海濱に多い鷗の様で夜光る特種の鳥だと有る」[「和漢三才圖會 卷第四十四 山禽類 姑獲鳥（うぶめ）」](#)（オオミズナギドリ？／私の独断モデル種比定）を参照。そこで妖怪としての「うぶめ」についての私の複数の電子化物へリンクもさせてある。

「プリニウスの博物志十卷六七章に、獨逸のヘルキニアの林中にその羽夜火の如く光る鳥住むと云ひ」所持する平成元（一九八九）年雄山閣刊の中野定雄他訳になる第三版「プリニウスの博物誌I」から引く。『われわれはゲルマニアのヘルキニアの森に、夜になると火のように輝く翼をもつ不思議な種類の鳥がいると聞かされている。しかし他の森ではそれが遠いというので評判が悪いこと以上に別に変わったことは起こらない。』。ヘルキニアの森は、現在のドイツ南部からチェコにかけての山岳地帯、特に現在のチューリンゲン・ボヘミア・モラヴィアの辺りを指すと考えられているらしい（[ブログ「地球と気象・地震を考える」の『地球環境の主役 植物の世界を理解する』](#)、[森の民ゲルマニー人を「ガリア戦記」より読み解く](#)）に拠った）。この中央附近に当たる（グーグル・マップ・データ）。「一八八五年板ベントの希臘諸島住記（ゼ・シクラデス）四八頁」イギリスの探検家・考

古学者で作家でもあったジェームス・セオドア・ベント (James Theodore Bent 一八五二年～一八九七年) の『*The Cuckades*』(「キクラデス諸島」: エーゲ海中部に点在するギリシア領の二百二十以上の島から成る諸島。位置は当該ウィキの地図を参照されたい)。当該箇所は「[Internet archive](#)」の[こちら](#)。

「ユリッセス」ホメロスの「オデュッセイア」の主人公でギリシャ神話の英雄オデュッセウス。彼の英名「Ulysses」(ユリシース)の音写。

「ハルピースなる怪鳥」オデュッセウスが海上で誘惑された海の怪物セイレーンは、当初は上半身が人間の女性で、下半身は鳥の姿とされたが、ロケーションから後世には魚の姿と変化してしまった。熊楠の音写もの元はよく判らぬが、古代ギリシア語の異名の一つに「パルテノペー」「テレース」辺りを混同したものか。

「ペンナントが十八世紀に出した動物学」ウェールズ出身の博物学者トーマス・ペナント (Thomas Pennant 一七二六年～一七九八年) 動物学を冠した書は複数あるが、以下の記載からは、一七六六年に刊行した最初の『*The British Zoology, Class 1, Quadrupeds. 2, Birds.*』の「第二部 鳥」か

「冬 鷗」winter gull。チドリ目カモメ科カモメ属セグロカモメ *Larus argentatus* の後頭部から頸にかけて褐色の小斑が現われる冬羽のそれか。

「星 弾」star shot。

「星 膠」star jelly。

「蚯蚓」発光するミミズは、北半球の温帯地域(ヨーロッパ・南北アメリカ及び日本)に広く分布する環形動物門貧毛綱ナガミミズ目ムカシフトミミズ科 *Microscolex* 属ホタルミミズ *Microscolex phosphoreus* 等(同種については当該ウィキを参照されたい)が知られており、腑に落ちる。

「ハズリット諸信及俚傳二・六三六頁」イギリスの弁護士・書誌学者・作家ウィリアム・カルー・ハズリット (William Carew Hazlitt 一八三四年～一九一三年) 著『*Faiths and Folklore*』(「信仰と民俗学」)。[「Internet archive」](#)の[こちら](#)だが、六三七ページにかかっている。

本篇の首に引いた夏竦上元應制詩に龍燈に對して用いた鶴燄も、或は鶴に似た鳥の羽が火の如く夜光るを指した物か。新井白石が室鳩巢に話せし其頃、常陸の鹿島の社への鳳凰來義と云ふ事、「一夕夜深(いっせ)てサワサワと社も鳴動仕り候て、暫く有(これあり)之何かは不分明に候へども廣庭の中ひしと寶珠の如く成(な)もの敷候、光輝申候。稍有(これあり)てのし申と見え、又最前の如く鳴動有之。右の珠一所により候様に見え候て飛去り申候。怪異の義と社人ども駭(おど)き候て鳳凰杯と申す義は存(おも)も寄(よ)り、翌日託宣(たつせん)を上(た)候處、神託に夜前鳳凰來賓嬉しく被(おほ)しめしなむ思召との義候云々」とあって、白石鳩巢共に之を眞實と心得たらしい書振だ(鳩巢小説下)。是は何か光り物を見た者が、臆(おそ)げに孔雀が尾を開き又摺(た)む事などに思ひ合せて言出した事らしく、託宣を聞いて始めて分かる様では餘り宛に成らぬが、鳥

が夜光る例の序に書いておく。一九〇五年板フレザーの王職古史アンソニー・ヒストリー・オヴ・キングダムに、インド洋マルヂヴ島において、毎年定期にマレちふ所に鬼を乗せた光る船が夜來るに一室女ひとりのむすめを供へた事を述べて、カイウス大學のガージナー氏親しく彼島かのに遊び著者に報ぜしは、今も其渦かた共の淺瀬に時々光り物を見るに、磨すりガラスで覆ふた晶燈クラウンの火のごととあるを、老友ジキンス是は未だ學者に精査せられざる動物が一疋毎に斯かる無類の大きな光を出すのだらうと説いた（一九〇六年板上古・中古の日本文翻譯之卷、八八頁）。吾邦こくにわなども古いにしへ諸處に森林有り、煙突鐵砲は愚か竈の煙や弓矢さえ知らぬ様な人少ない地多かつた世には、今日既に蹟を絶つた生物も多かつた筈で、鳩鶯蒼鷺斑蜘蛛螢等現存する僅々諸種の外に、夜光る動物も數有つたなるべく、其光を目撃する機會は今より廻はらかに多かるただらう。此等生物が光を出すは雨夜とか月夜とかそれぞれ得意の時有り、螢は初夏と云ふ風に、季節の定つた者も多かうつたらう。されば其最も盛な夜を多年の経験で心得置いて、當夜を待ち設けて眺めて其靈異を讚歎し、種々の迷説を附會したのが龍燈崇拜の起りだらう。

「やぶちゃん注…「鳩巢小説下」の当該部は、[国立国会図書館デジタルコレクションの「続史籍集覽第六冊」の画像のここから次のページにかけてで視認出来る](#)。活字がすつきりとしていて読み易い。

「一九〇五年板フレザーの王職古史〔アーリー・ヒストリー・オヴ・キングダム〕イギリスの社会人類学者で「金枝篇」で知られるジェームズ・ジョージ・フレイザー (James George Frazer 一八五四年～一九四一年) が一九〇五年刊行した『*Lectures on the early history of the kingship*』 (「王権の初期の歴史に関する講義」)。

「今も其渦共の淺瀬に時々光り物を見るに、磨ガラスで覆ふた晶燈ランプの火のごとし」これは一読、発光性ゴカイではないかと私は確信した。無論、ウミホタルやヤコウチュウでもよいのだが、この渦が本当に渦ならば、この二種よりもゴカイである可能性が有意に高くなる。例えば、本邦では環形動物門多毛綱サシバゴカイ目ゴカイ亜目シリスコ *Odotosyllis* 属クロエリシリコ *Odotosyllis undecindonta* が知られる。[グーグル画像検索「Odotosyllis undecindonta fire worm」](#)をリンクさせておく。この発光は、まさに「磨すり」(すり)「ガラスガラスで覆ふた晶燈ランプの火」と形容するに相応しいではないか！

「一九〇六年板上古・中古の日本文翻譯之卷、八八頁」『*Primitive and Mediaeval Japanese Texts*』はイギリスの日本文学研究者・翻訳家でフレデリック・ヴィクター・ディキンズ (Frederick Victor Dickins、一八三八年～一九一五年) の著。[「Internet archive」で原本の当該部](#)が読める。面白いところに挿入されている。前のページのある通り、「万葉集」の山上憶良の「日本挽歌一首」(七九四番)だ！しかし、ここから前の記載を「不知火」の光学現象とする訳には、私は、絶対に「ノー！」だね！

似た譚は、巖谷君いそやの東洋口碑大全に、本朝怪談雑事から、出雲佐田いそだの社に毎年十月初卯の日、龍宮から牲いけにえとして龍子一疋たつこ上る由引き居るが、懷橋談には、「十月十一日よ



り十七日までを齋と云ふ、其間に風波烈しく寄來る波に、化度草と云ふ藻に乗れる龍蛇、龍宮より貢ぐ云々」と有る。予彼邊(かのあたり)に毎々航せし船頭に聞きしは、何の日と定らず、其頃風波烈しく成つて多少の海蛇打上るを、初めて見出したるを吉兆とする例と云うた。故に天然の龍燈乃ちエルモ尊者の火、又鳥蟲朽木から起る光も、必しも年中一日を限らず、唯季節が向いて來ると毎夜現はるゝを、その月の満月又は十六夜とか齋日の夜とか、神佛に縁ある夜を人が特定して、その夜尤も見るに都合よきを、其夜しか出ぬ様に言ひ傳へたに外ならじ。特定の木の上に龍燈が懸かるも、天然を人為で(わざ)枉れば成る事で、古地峽有つて今海と成(なり)つたに渡鳥が依然地峽の蹟の海を後生大事と守つて飛ぶと云ふ話も多く、兎や猪鹿や鴨などの路が定まり居るは狩人の熟知する所で、比年予自宅の庭園へ夕に天蛾(あふが)など來て花を吸ふを視るに、その行路から花を尋ぬる順序迄一定せる者の如く、又自宅の近街何れも陰囊の影を火玉と間違へ怖るゝ程淋しい處へ、電線の柱が多く立並び居る、其頂へ夏の夜毎に角鴟(つづ)が來り鳴くを見聞するに、其行路と順序がちやんと定り有る。先は不景氣ゆゑ方法を立替へるなどいふ考(かんが)の出ぬ所が畜生で、古く慣習附(つ)いたことを出來得る限り改變せぬ。

「やぶちゃん注…『東洋口碑大全』作家・児童文学者の巖谷小波(いわやせなみ)(明治三(一八七〇)年(昭和八(一九三三)年)が編したもの(大正二(一九一三)博文館刊・上巻のみ出版か)。国立国会図書館デジタルコレクションのここから次のページにかけてで視認出来る。「本朝怪談雑事」上記の引用元では「本朝怪談祕事」とあるが、恐らくは孰れも誤りで「本朝怪談故事」ではないかと思われる。それなら、厚誉春鶯廓玄の著。江戸中期の刊のようである。

「出雲佐田の社」佐太神社(さた)が正しい。「東洋口碑大全」自体が誤っているので、熊楠のミスではない。

「龍子」実在する海蛇(うみへび)の爬虫綱有鱗目へビ亜目コブラ科(ウミへビ科とする説もある)セグロウミへビ属セグロウミへビ *Pelamis platura* である。この龍神祭は古くから有名で、私も幾つかの記事で注してきたが、『小泉八雲 落合貞三郎訳 「知られぬ日本の面影」

第八章 杵築——日本最古の社殿 (五)』にとどめを刺すであろう。

「懷橘談」藩儒であった黒沢石齋による出雲地誌。但し、熊楠が引用している部分は、「佐太」のパートではなく、「杵築」の出雲大社の解説の中に現われる。国立国会図書館デジタルコレクションの活字本のここである(左ページ二行目)。「佐太」神社はこちらになる。

「化度草」かく名づける以上は藻体特徴的でなくてはならないだろう。私は真っ先に気泡体を持つホンダワラであろうと踏んだ。如何にもそれらしいと感じたからである。種や博物誌は「大和本草卷之八 草之四 海藻(ナノリン/ホタハラ) (ホンダワラの仲間)

問)の私の注を参照されたいが、さて、「佐太神社」公式サイトを見たところ、ここに、まさにホンダワラが供物や神からの縁起物とされている記載があった。自信を固くした次第である。

「天蛾」これは「夕顔別當」で、広義には鱗翅目カイコガ上科スズメガ科 Spingidae の仲間を指すが、狭義には、特にスズメガ科スズメガ亜科 Acherontini 族 *Agrilus* 属エビガラ スズメ *Agrilus convolvuli* を指す。南方熊楠が言う以上、私はここでは同種ととっておく。】

エルモ尊者の火も又電気的作用と云ふから、適當した駐り木は粗定つて居るだらう。されば他へ飛反れぬ様に此等の光に尤も適した高木を保存して徐々其傍の高木を伐り去るとか何とか、龍燈を一定の木に懸くる方法は追々案出實行されたらう。斯て其後世中も事繁く人煙も濃くなり、天然の龍燈閉口して跡を絶つに及び、種々の祕計もて人爲の電燈を點すと成るとサア旨い物で、雨が降らうが鎗が飛ばうが興業主の決心次第で、何月何日何時何分と期しても確かに龍燈を一つでも五つでも出し得る筈で、尾芝君が想ふ程の人間界の不思議では決してなく、たゞ吾輩如き何様な妙案でも腹藏なく自ら言散し書散して一文にも成らぬに紙や暇を潰す者共と異なり、昔の坊主などが祕事妙訣ちふ事を首が飛んでも世間へ洩さなだから、億萬の生靈が龍燈如き手近い神變で感化せられて、佛教や天主教を根限り信仰歸依した一件は、今の人の大いに留意して勇猛に反省すべき所と、此二、三日飲まぬを幸ひ、柄にも無い事を演べて置く。

**結論** 佛教は——實は其他多くの宗教も——光を以て佛徳の表識とし、従つて佛菩薩に光を名とせるが多い。佛説大阿彌陀經に、彌陀の十三異號を説く（郷研究三卷三號一七〇頁参照）。其號孰れも光の字有り。言く、此佛の光、勝於日月之明千萬億倍、而爲諸佛光明之王、故號無量壽佛、亦號無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難稱光佛、超日月光佛《日月の明るさに勝ること、千萬億倍にして、諸佛光明の王たり。故に無量壽佛と號け、亦、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難稱光佛、難稱光佛、超日月光佛とも號く。》起世因本經には、人間の營火、燈焰、炬火、火聚「やぶちゃん注…激しく燃える猛火。仏教では地獄の業火も指す。」、星宿月宮、日宮、四天王天と次第して、長たらしく諸天光明の甲乙を述べ、世間所有光明よりも如來の光が最も勝妙と有る。扱最も手近く光明を標示する者は燈火だから、維摩經の佛國品の執寶炬菩薩などよりは、寶燈世界（大寶廣博祕密陀羅尼經）須彌燈佛（阿闍世王決疑經）燃燈佛など、燈を名とした佛士佛菩薩の名が多い。斯て佛の勢力が光明で顯はれる。其光明に滋養分を加へ奉る考で佛に燈を獻ずるを大功德としたので、言はゞ竈に薪を添えるやうぢや。

されば涅槃經には、若於佛法僧、供養一香燈、乃至獻一花、則生不動國云々、此即淨土常嚴、不爲三災所動也。《若し、佛法僧に於いて、一の香燈を供養し、乃至は一花を獻ずれば、則ち、不動國に生まる云々。此は、即ち、淨土常嚴にして、三災の動かす所と爲らざるなり。》東晉譯大方廣華嚴經一五に、諸光明の由來と功德を説いた中に、有勝三昧、名安樂、又放光明、名照耀、映蔽一切諸天光、所有闍障靡不除、普爲衆生作饒益、此光覺悟一切衆、令執燈明供養佛、以燈供養諸佛故、得成世中無上燈、然諸油燈及酥燈、亦然種

種諸明炬、衆香妙藥上寶燭、以是供佛獲此光「やぶちやん注…太字は底本では傍点」。

なお、「大藏経データベース」で確認したところ、この引用は一部に省略があるので、それが判るように二十鍵括弧を入れてある。』《勝に三昧有り、安樂と名づく》。『又、光明を放ち、昭曜と名づく。一切の諸天の光を映み蔽ひ、所有る暗障を除かざるなく、普く衆生の爲に饒益「やぶちやん注…慈悲の心を持って有情に利益を与えること。」を作す。この光は一切の衆を覺悟めしめ、燈明を執つて佛を供養せしむ。燈を以つて諸佛を供養する故に、世上の無上の燈となるを得。諸の油燈及び酥燈「やぶちやん注…牛乳から製したバターに似た油。密教で護摩の修法で用いる。食用にもなる。」を然やし、また種種諸の明炬、衆は香妙藥上の寶燭を然やし、是れを以つて佛に供へ、此の光を獲。』と説かれ、超日月三昧經には「やぶちやん注…以下の一文は底本では甚だ読み難いので、一部に読点や記号を挿入した。」、日天、前生、施を好み、行を慎み、戒を奉じ、佛寺に燃燈し、月天、前生、貧に施し、戒を持し、三尊に事へ、君・父・師等に燈を設けたから、今生、日天・月天と成るつたと有り。悲華經には轉輪王頂戴一燈、肩有二燈、左右手中執持四燈、其二膝上、各置一燈、兩足以亦各一燈、竟夜供養如來《轉輪王は頂きに一燈を戴き、肩に二燈有り、左右の手中、四燈を執り持ち、其の二つの膝は上、各一燈を置き、兩足の上に亦各一燈を以つてし、夜の竟るまで、如來を供養す。》とは、寄席の落語家が頭と口と兩手足に扇一つ宛持つて、「チツ、一本めーには」と松盡しを基盤の上で舞ふより以上の珍藝だ。

月燈三昧經こそ大法螺吹きなれ。云く、聲徳如來涅槃に入りしを徳音王供養すとて、八十四千萬億の塔を起こし、一々塔前に百千萬那由他「やぶちやん注…一那由他は一十億。」の燈明を燃す。安穩徳比丘負嫌ひで自ら臂を斷つて燈を燃して獻ぜしに、今まで炯然たる「やぶちやん注…光り輝くさま。」紅燄四方に遍照せし王の無量百千の燈一時に光を奪はれ、王を始め後宮眷屬妃后采女、總て八萬の別嬪急いで彼比丘に見えんとて、千肘の高殿より飛下るを、天龍夜叉乾闥婆等の鬼神護持して落ちざらしめた。島田の宿の朝顔盲女の川留の場の如しと有る。扱兎角女ならではの夜が曉けぬから、彼比丘を貧女と作り換へて、阿闍世王決疑經や今昔物語十五の貧女の一燈の譚を作つたのだ（芳賀博士の攷證本には、本邦の類話を擧居るが、決疑經等を引いて居無い）。例の法華經の藥王菩薩本事品は菩薩が燈供養の爲に身を焼いた話で、臂ばかり焼いた所の騒ぎに非ず。これに倣うて頭燈臂燈等の外に全身を焼失ふ者も有つたのだ。今昔物語に天智帝が志賀寺の燈を掲げた指を切て、燈と共に佛に供へ玉ふと有るも、指を燃す御心で行ひ玉ひし事と知らる。

「やぶちやん注…島田の宿の朝顔盲女の川留の場」浄瑠璃「生写朝顔話」（通称「朝顔日記」）。講釈師司馬芝叟の「薺」を原拠とした浄瑠璃。現行のものは天保三（一八三二）年大坂稻荷文楽芝居で初演。秋月家の娘深雪が、恋人宮城阿曾次郎を慕つて家出し、盲目の門付芸人朝顔となり、恋人の残した歌を唄いながら流浪する哀話。「大井の渡し」で知られる島田の宿で恋人と逢いながら、朝顔が盲目ゆえにそれと判らず、後で知り、半狂乱

で彼を追う「島田宿戎屋の段」から「大井川の段」が知られる。

「今昔物語十五の貧女の一燈の譚」これが、一向、判らぬ。「今昔物語集」の「巻第十五本朝付仏法」では、第四十八話から最後の五十四話の七話にのみ女性・童子の往生譚が纏められてあるのだが（それ以外は著名な僧尼のそれである）、そこに「一燈の譚」はないからである。ある種、最も似ていると思われるのは、私も好きな「伊勢國飯高郡老嫗往生語第五十一」（伊勢の國の飯高郡の老いたる嫗往生する語第五十一）である。「やたがらすナビ」のここで新字であるが原文が読める。しかし、そこで老婆で持つのは「一葉の蓮花」であり、また、彼女は使用人もいるので「貧女」とは言えない。さて?……因みに、芳賀矢一の「攷證本」というのは「攷証今昔物語集」で、国立国会図書館デジタルコレクションの富山房では私の示した話はここ。

「今昔物語に天智帝が志賀寺の燈を掲げた指を切て、燈と共に佛に供へ玉ふと有る」巻第十一「天智天皇建志賀寺語第二十九」（天智天皇志賀寺を建てたる語第二十九）。同前でこ。

蓋し人間のみが燈を佛に奉るを大功徳としたので無く、鬼人や龍王も亦争うて此功徳を修めたので、例せば法顯傳に、舍衛城の外道が天神を祀る寺で燈を供ふると、明旦燈が近處の佛寺に移る。是れ佛僧の所爲ならんと疑うて夜自ら伺ふと、自分が祀る所の天神其燈を持ち、佛寺を三匝して佛に供へて消失せた。因つて成程佛は天神より勝いと知つて出家入道したと有る。龍が燈を佛に供養した例を只今出し得ぬが、其は例乏しくて引き能はざるに非ず、餘り多いから藏經通覽の際書留めなんだのだ。扱手近い梵語字彙を二三種見るも、龍燈ちふ意の語を見出でぬが、三國の吳の領内來住の天竺僧康僧會が譯した六度集經五に、槃達龍王世を厭ひ陸地に登り、於私黎樹下、隱形變爲蛇身、槃屈而臥、夜則有燈火之明、在彼樹上、數十枚矣、日日雨若干種華、色耀香美、非世所覩、國人有能厭龍者、名陂圖、入山求龍、欲以行乞、覩牧牛兒、問其有無、兒曰、吾見一蛇、蟠屈而臥於斯樹下、夜樹上有數十燈。火光明耀、華下若雪、色耀香美、其爲難喻、吾以身附之、亦無賊害之心《私黎樹下に於いて、形を隱し、變じて、蛇身となり、蟠屈して臥す。夜は、則ち、燈火の明有り。彼の樹上「やぶちゃん注」：「大藏經データベース」では「下」であるが、ここは敢えて熊楠の記す「上」で示した。」に在りて、數十枚たり。日日、若干の種の華を雨らす。色、耀き、香、美にして、世の覩る所に非ず。國人、能く、龍を厭ふ者有り、「陂圖」と名づく。山に入りて龍を求め、以つて行乞をせんと欲す。牧牛の兒を覩て、其の有無を問ふに、兒曰はく、「吾、一蛇の蟠屈して、斯の樹下に臥すを見る。夜、樹上に數十の燈あり。火。明る耀り、華の下ること、雪のごとし。色、耀き、香美なること、其れ、喻へ難しと爲す。吾、身を以つて之れに附くに、亦、賊害の心無し。」と》。其からその龍使ひの見世物師に捉へられて齒を抜かれ、所々へ伴行きて舞はさるゝを龍王の母が來て救うたと有る。是れ取りも直さず龍燈で、印度に古く龍の上に燈火が樹に懸るてふ迷信有りしを知るに足る。

「やぶちゃん注…「法顯傳」現行では「ほっけんでん」と読まれる、五世紀初頭に約十七年に互ってインド求法の大旅行を行った中国僧法顯の記録。中央アジアと南海沿岸を含む紀行ともなっている。「大蔵経データベース」では、熊楠が引いたのはこの前後部分である。

「舍衛城」は古代インドのコーサラ国にあった首都。現在のウッタール・プラデーシュ州北東部のラプティ川の近くに相当する。この中央附近（グーグル・マップ・データ）。

又大集大雲請雨經に、電光大電光炎光火光など、光字のついた龍王の名多し。乃ち古印度も支那と同じく龍は種々の光を發すると信じたので、支那に佛教入らぬ時已に龍が光を點すとしたは、楚辭の燭龍何照《燭龍何ぞ照らせる》の語を、王逸注して曰く、大荒西北有山而不合、因名之曰不周山、故有神龍、銜燭而破照之《大荒の西北、山有りて合せず、因りて之れを不周山と名づく。故に神龍有りて、燭を銜へて之れを照らす》（淵鑑類函四三八）。康熙字典に楚辭天問を引いて、日出不到、燭龍何ぞ耀《日出でて到らず、燭龍、何ぞ耀ける》。日出ぬ内に龍が燭を銜へて光らせ行くと云ふのだから、燭龍乃ち龍燈だ。斯く古來燭龍の話や前述龍火の迷信が有つた支那へ、印度から佛教と共に龍燈の譚が傳はつたので、諸州の道觀佛精舎や大小名嶽に天然の龍燈多く見出され、追々人造の物も出來た處へ、日本から渡海の僧など、其事を聞き其現象を睹て歸る船中海上の龍燈即ちエルモ尊者の火に遭ふも少なからず、歸朝して尋ね廻ると自國も隨分龍燈に乏しからず。因つて弘教の方便として種々の傳説を附會して、俗衆をアツと言はせ續くる内、海埋まり林伐られて自然の龍燈少なく成り行く。是では成らぬと、困却は發明の母とはよく言つた物で、種々計策して人造の龍燈を出しても、因襲の久しき習慣天性を成して誰も其人造たるに氣付かず、偶ま玄奘が菩提寺の舍利光に於ける如く、臭い事と氣が付いても、勝軍居士が玄奘を論した通り、誰も彼も睹て信ずる上は一人彼是いふは野暮の骨頂といふ論法で差控えた事と見える。

さてダーウキンは蘇蟲と海龜と鳥が甚だ相異なる動物で何の近縁無きに、三者の喙の結構が頗る酷似し居るを指摘し、予も或菌族と男女根の組織と、機械力が全く同一轍なる事を二十五年來研究して、隨分有益な考案を持つて居るが、斯る外目に詰らぬことも學術上非常に大切だと云ふ事だけを一昨年不二新聞へ掲げて大枚百圓の科料に處せられ、前に火の玉幻出法の發明に間に合ふた陰囊を大きに縮めた事で有る。先づ千年や二千年で迎も變更の成らぬ動植物の構造や組織にすら、相似た範圍に應じて永久の内には斯く能く似合うた物も出来る。されば風俗作法など變化萬態なる人間界の現象が、因異にして偶ま同一又極似の果を生出する有るも、固より怪しむに足らず。例せば、吾邦婦女が齒を染めたのは東南亞細亞の土人が檳榔を咬むに起因したといふことを森三溪氏など唱へ、故坪井博士も同意の氣味らしかった。然るに二十年程前予大英博物館で色々調べると、印度の梵志種や柬埔寨土人の女子が、月經初て到る時、非常に齒に注意する。又中央亞細亞のブラハラ人歐州の大露西亞人など、一向檳榔を吃せぬに其妻は齒を涅くした。其等から攷へて、

廣い世界には南米の或部分の土人の如く、齒の健康を氣遣ふばかりで齒を染めるも有り、<sup>マダガスカル</sup>馬島の或種族の如く裝飾をのみ心懸けて齒を染める者、亞細亞東南諸島民の如く檳榔を咀むから自然に染まる者、日本や印度チーウ邊の婦女の如き成女期や既婚や葬喪を標示する齋忌の上から涅齒した者と、同じ涅齒にも種々格別の目的有りて此風が生じたと曉り、<sup>ブリタニカ</sup>英國科學獎勵會で論文を讀んだ事が有つた。

「やぶちゃん注」<sup>ブリタニカ</sup>「蘚蟲」小さな群体を形成し、サンゴに似た炭酸カルシウムなどの外壁からなる群体を作る動物である外肛動物門 Bryozoa の一般に「ロケムシ」(苔蟲) のこと。下位タクソンで狭喉綱 Senolaemata・裸喉綱 Gymnolaemata・掩喉綱 Phylactolaemata に分けられている。小学館「日本大百科全書」によれば、世界で約四千種が知られている。古い動物で、化石は古生代の末期から出現している。嘗ては、擬軟体動物や触手動物の門に属したこともあるが、現在では外肛動物という独立した門を構成する。海産の種が淡水産よりも多く、潮間帯から深海にまで分布する。微小な個虫が多数集まって樹枝状・鶏冠状・円盤状などの群体を作る。群体は石灰質又はキチン質を含むため、硬く、岩石や他の動植物に付着する。それぞれの個虫は虫室の中に棲み、袋状を成し、口の周りには触手冠がある。消化管はC字状で、肛門は触手冠の外側に開く。血管と排出器がなく、雌雄同体で無性生殖により群体を拡大するとある。当該ウィキには、『裸喉綱では、群体を構成する個虫に多形がみられる例が多い。触手を持ち、えさをとる普通の個虫を常個虫という。これに対して、特殊な形になったものを異形個虫と呼んで』おり、その内の「鳥頭体」(avicularia) と呼称するものがあり、これは『個室の入り口がくちばし状になって突出したもので、『外敵の防衛や群体の清掃』を担うとある。探すのに少し苦労したが、英文サイトのこちらのブラジル産のコケムシの当該部分の顕微鏡写真四葉を見ると、それを「嘴」と比喩することが、激しく腑に落ちる。

「檳榔」<sup>南方熊楠</sup> 小兒と魔除 (5) の私の当該注を参照されたい。

「森三溪」(元治元(一八六四)年〜昭和一七(一九四二)年) は明治三一(一八九八)年民友社刊の「江戸と東京」を書いた人物ではないかと推察する。但し、以上の説はどこから引用したかは不詳。因みに、『江戸と東京』の鉄漿(おはぐろ)の記載はここ。

「坪井博士」日本初の人類学者坪井正五郎(文久三(一八六三)年〜大正二(一九一三)年)。日本に於ける考古学や人類学の普及と確立に尽力した。」

其から類推すると、尾芝君は盆の燈籠も柱松も龍燈も同一系統、乃ち同じ目的を以て一つの起原から生出した様に云はるゝが、其は形骸を察して神髓を遺れた見で無らうか。磁石に鐵を拾ふと北を指すと二つの別の力有る如く——究竟の原因は一に歸すと云はゞ、人が生まるゝも焦死ぬも太陽の爲す所と云ふ如くで、其迄ながら——火には熱と光との二つの異なる力有り、吾邦の柱松や歐州の辟牛疫火など、主として其火の熱を以て凶災を避け吉利を迎ふるの慾願に創まりたるに、盆燈籠や人作の龍燈は、原と其火の光を假りて神佛の勢威を助成し死人の冥福を修する信切から起つた者で、言はゞ齊しく火で有

りながら、火鉢の火と行燈の火ほど意味と所用に差別有り(けしめ)と愚存す。加(しのみならず)之柱松は其式何の祕する事無く初めから仕組を公開するに、龍燈は自然人造共に其事曖昧で、凡衆に解し得ぬ所を妙としたのも大(おほ)に相異なり。(大正四年六月二十三日起稿、多用中に時々書き綴り、三十日夜半終切。唯一度閲して便ち發送。故に意を盡さぬ所や跡先き揃はぬ言無きを保せず。讀者其大體を了せらるれば幸甚。)

「やぶちゃん注」辟牛疫火(ニード・ファイヤー)「Need-fire」或いは「Wild-fire」。スコットランドの古い民間伝承に基づく儀式で、羊飼いたちが、羊の群れの病気を防ぐために火を用いたものを指す。英文のウィキの「Need-fire」に拠ったが、ここに牛のことが書かれてあるが、熊楠の漢訳の「辟牛」は、羊とともに飼っている牛も疫病を避けられるということか。よく判らない。「浄火」などと訳されるようである。

以下、底本では一行空けだが、二行空けた。」

## 附言

此稿を終る少し前に、湯屋に往(い)て和歌山生れの六十ばかりの人に逢うて、七月九日夜紀三井寺に上る龍燈の事を問ふに、八、九歳の時父に負はれて一度往き見た事有り。夜半に喚(よび)起こされて眠たきを忍び待つて居ると、山上に忽然燈(ともし)點るを見たばかり覺え居ると言うた。其邊に人が忍び居(ま)て、何かの方法で高い所へ燈を點じ素速く隠れ去つたらしい。貞享四年の自序ある懷(ふし)硯(いん)三の二に、紀三井寺の龍燈を見に夜更くるまで人群集する由を述べて、「昔より所の人の言傳へしは、この光を見ること人の中にも稀なり。隨分の後生願(ごしょうねがひ)ひ、人事を言はず、腹立てず、生佛様と言ふ程の者が、仕合せよければちらと拜み奉ると聞きし所に云々」と有つて、十人の内七八人は磯に釣する火を龍燈と心得て拜し、其他は觀音堂に通夜して、夢に龍燈布引の松に上るを見たとあり。布引の松は紀三井寺から大分離れた所で、それを後年山内の千手谷へ龍燈の場所換へをしたらしい。

「やぶちゃん注」・「貞享四年」一六八七年。

「懷硯三の二」同書は井原西鶴著の諸国奇談異聞集の体裁を採った浮世草子で外題は「一宿道人 懷硯」で、当該篇の標題は「龍燈は夢のひかり」。早稲田大学図書館「古典総合データベース」のこちら (PDF全巻一括 PDF版) の511頁目から原本が視認出来る。

「人事」人の悪口。

「其他は觀音堂に通夜して、夢に龍燈布引の松に上るを見たとあり」とあるが、同篇では、実は、その瑞夢を見るのは、当の無欲な主人公の一宿道人自身である。そこがこの話の面白みともなっているのである。

以下、底本では一行空け。二行空けた。」

## 後記

前文記し畢(をば)つて四日後、人類學雜誌昨年十二月號原田淑人君の「新疆發掘壁畫に見えたる燈樹の風俗に就て」を讀み、甚だ益を得た。氏が臚列(るれい)「やぶちゃん注…『羅列』に同じ。」せる諸材料に據つて考ふれば、史記樂書、漢家祀太一、以昏時祠到明《漢家、太一を祀る。昏くるる時を以つて祠まつり、明くるに至る。》等、古く神を祀るに燈を獻ずる事有りし一方には、印度燃燈供佛の風を傳へ、唐人上元の夜華燈寶炬燈樹火山を設け、宋に至つて上中下元咸張燈し、吾邦之に倣うて又中元燈籠を點ずるに及んだので、先づ盆燈籠は華燈、柱松は寶炬、火山は熊野濱の宮等中元に墓場で野火を盛んにするに相肖(あひし)た物、燈樹は原田君が引いた圖や説に據ると、先づ七夕に俗間竹の枝葉間に多く小挑燈(こちやうしん)を點ずるやうな奴の至つて大層なものだらう。是等何れも設備者其人巧に出るを隱さず、寧ろ自慢で作つたので、觀る者も初から其心で見たるに反し、人造電燈は始終設備者之を神異に托し、觀る者亦靈物として之を恭敬禮拜したのである。(七月五日)

此篇書き畢つて後、七月七日の大阪毎日新聞獨石馬の清末の祕史を見ると、長髮賊魁洪秀全と楊秀清を月水に汚れた布の冠で呪うた趙碧孃は、事顯はれて楊の爲に天燈の極刑に處すべく命ぜられた。天燈とは罪人に油を泌ませた單衣を著せ、高き梁上に倒懸(たふかまひ)して下より徐(おもむ)に肉體を油煎(あぶり)にする五右衛門以上の酷刑だが、碧孃は刑前自殺したとある。(七月七日)

(大正四年十一月郷研三卷九號)

龍燈と云ふもの、始めの程は知らず、後年目撃せられたのはほんの一寸の間の現象で、至極曖昧な物だった(郷研三卷九號五三二―三頁參照)。高名なる丹後切戸の龍燈天燈なども亦さうであつたと見えて、寛永十年に成つた犬子集(いぬのしむ)十七にも、貞徳(?)の「有りとは見えて亦無かりけり」、「橋立や龍(たつ)の燈あぐる夜に」と云ふ句がある、此序に云ふ。同書十四又貞徳の「びやうびやうとせし與謝の海づら」。「龍燈のかげに驚く犬の聲」と云ふ句がある。其頃は犬の鳴聲を邦人がびやうびやうと聞いたので、狂言記にも犬の聲を皆かく記してある。偶ま英語のバウワウ佛語のブーブー(孰れも犬吠(いぬほえ)の名)に似て居るのが面白い。(四月十一日)

(大正五年十二月郷研究四卷九號)

「やぶちゃん注…『人類學雜誌昨年十二月號原田淑人君の「新疆發掘壁畫に見えたる燈樹の風俗に就て」「[stage]のこちらで原本画像で読める。」

「熊野濱の宮」和歌山県東牟婁郡那智勝浦町にある熊野三所大神社の境内に浜の宮王子社跡(グーグル・マップ・データ)として残る。

「獨石馬」久木独石馬(ひさきどくせきば)(明治一八(二八八五)年〜昭和一三(一九三八)年)は評論家。茨城県出身。本名は東海男(とみお)。『常總新聞』の記者などを経て、明治四三(一九一〇)年、大阪毎日新聞社に入った。この後の大正七(一九一八)年に退社し、東京に移って著述に専念した。『雄辯』などに寄稿するとともに、幕末の水戸藩史を研究。野口雨情と親しかつた。「清末の祕史」は不詳。

以下、底本では一行空け。二行空けた。



「洪秀全」（一八一四年～一八六四年）は清末の「太平天国の乱」を起こした最高指導者。自らを「エホバの子」であると称し、「上帝会」を組織。一八五一年、挙兵して自ら「天王」と称し、国名を「太平天国」とぶち上げた。南京を攻略して都としたが、内紛を起こして清軍に敗れ、南京陥落直前に病死した。

「楊秀清」（一八二〇年頃～一八五六年）は「太平天国」の最高指導者の一人。一八四八年の弾圧によって、初期の信徒集団に動揺が起こった際、上帝エホバが乗り移った（「天父下風」と称した）として、その意志を伝えて危機を克服、以後、しばしばこの「天父下風」を利用して軍事的指導権を握り、天王洪秀全に次ぐ「東王」に任ぜられ、「太平天国」運動の発展を推進した。南京建都後、その専横に対する天王らの反感が強まり、一族及び部下約二万名とともに殺害された。

「月水」生理の血であろう。

「趙碧孃」不詳。識者の御教授を乞う。

「寛永十年」一六三三年。

「犬子集」俳諧集。全十七巻五冊。松江重頼編。「守武千句」「犬筑波集」以後の発句・付句の秀作集。

「貞徳(?)」原本を確認出来ないので、「?」は外せない。

「英語のバウワウ佛語のブーブー(孰れも犬吠の名)」英語では「bow-wow」、フランス語では「ouah-ouah」(音写は「ウワウワ」が正しい)。因みに、イタリア語では「bau-bau」(バウバウ)、スペイン語では「jau-jau」(ジャウジャウ)、ドイツ語では「haf-haff」(ハハフ)とこちらにあった。

以上の最後の段落は「選集」では『追記』と冒頭して、本篇の一番最後に配されている。なお、以下は底本では一行空けであるが、二行空けた。」

## 龍燈補遺

椋梨一雪の新著聞集往生篇第十三に、上總福津(ふつじ)のじゃじゃや庄右衛門てふ大若黨者、一心の念佛者となり人多く導いた。自ら死期を知り、三日前から日來頼んだ寺に往つて、本堂彌陀の前に端坐合掌唱名して眠る如く往生した。信者輩に七日間死骸を拜ませると、「虚空に花ふり夜は龍燈上りて堂内に入りしを拜みし人多かりし」と載す。死んで間もなく龍燈まで上つたのは予に取つて未聞なれば一寸記して補遺とする。(十二月三日)

松屋筆記卷七十八に佐渡奇談より引いた、寛永の頃鈴木源吾なる浪人が根本寺(こんぽんじ)祖師堂(そぼ)側の櫻の古木より夏の夜龍燈來ると聞き行きて射たる處、忽ち消え翌日見れば鷺なり、寺僧、電燈の奇瑞を妨げられしを含み、寺内で殺生せし罪を訴へると、龍燈を射たり鷺を射すと辯じて事解けた由は、尾芝君も短く引かれた。然るに十月十六日のノーツ、エンド、キーリスに、英國のイー、イー、コープ氏が書かれたは、彼方(あち)でも鷺が夜光ると云ふに付て、同氏曾て一九〇六年十二月のカナリア及小鳥飼養雜誌に載せ、又バーチングのレ

クリエーション、オヴ、ア、ナチュラリストてふ書にも出であるとの事だ。(十二月四日)  
又前號四五八乃至九頁に載せた天狗の炬火は不定時に出たものらしいが、龍燈同様に定日の夜出た天狗火もある。紀伊續風土記卷八十一に、今の東牟婁郡三輪崎村の丑の方十七町、往還の下海邊平らかなる岩の上に、輿(こし)の如く窪みたる所が三つ有るを、三所洗岩と謂ふ。此岩に毎月七日二十八日頃天狗來つて身を清むると言傳へて、天狗の火時に見ゆと云ふてある。(十二月四日)

(大正五年一月郷研究三卷十號)

「やぶちゃん注」新著聞集往生篇第十三に、上總福津のじやじや庄右衛門てふ大若黨者……「新著聞集」は寛延二(一七四九)年刊の説話集。各地の奇談・珍談・旧事・遺聞を集めたもの。当該ウィキによれば、全八冊十八篇三百七十七話。書名は鎌倉時代の説話集「古今著聞集」に倣ったもの。先行する同一作者によると目される説話集「古今犬著聞集」や「続著聞集」との『関連が深い』。『著者名は記されておらず』、『不詳』とされていたが、森銃三の指摘により紀州藩士の学者『神谷養勇軒が藩主の命令によつて著したことが定説となっている。しかし』、『新著聞集』の内容は俳諧師椋梨一雪による説話集「続著聞集」を再編集したもので、正確には、『神谷養勇軒は編者であると考えられる』とある。早稲田大学図書館「古典総合データベース」のこちら(PDF 卷十三と十四の合本・初版の後刷)の20コマ目から視認して電子化しておく。句読点・記号を打った。ルビは一部に留めた。なお、本文の「大若黨者」はママ。「選集」もママであるが、以下に見る通り、「大惡黨者」が正しい。

\*

竜灯室に入り彩花空に充みつ

上總の福津に、じやじや庄右衛門とて、大惡黨者有しが、いかなる過去の因縁やありけん、一不亂の念仏者となり、人多くすゝめて、勤めさせけり。少し違例のこゝちなりしが、兼て、死を、しり、一族朋友の方、悉く、いとまごひに歩き、死の三日まへより、日來たのみし大樹寺「やぶちゃん注」：「し」清音はママ。」にゆきて、本堂の彌陀のまへに端座合掌し、念佛、間なく申、眠がごとくに、息たへ侍りしを、年來の信者、「殊に往生のやうす、たゞならず。」とて、七日が間、死骸を拜せけるに、虚空に五色の花、ふり、夜は、龍灯、あがりて、堂内に入りしを拜し人、多かりし。

\*

この「福津」は現在の千葉県富津市(グーグル・マップ・データ)。「大樹寺」は不詳。

「松屋筆記七十八に佐渡奇談より引いた、寛永の頃鈴木源吾なる浪人が……」「松屋筆記」は国学者小山田与清(ともきよ)天明三(一七八三)年(弘化四(一八四七)年)著になる膨大な考証隨筆。文化の末年(一八一八年)頃から弘化二(一八四五)年頃までの約三十年間に、和漢古今の書から問題となる章節を抜き書きし、考証評論を加えたもの。元は百二十巻あったが、現在、知られているものは八十四巻。松屋は号。国立国会図書館デジタルコレクションの活字本画像ではここから。(十三)龍燈」の末尾(次のページになる)

に配された頭書の中に出る。「根本寺」は現存する。日蓮宗で、ここ（グーグル・マップ・データ）。

「バーチングのレクリエーション、オヴ、ア、ナチュラリスト」不詳。

「紀伊續風土記卷八十一に、……」国立国会図書館デジタルコレクションの原本のここだが、その標題は「御手洗岩」だ。「今の東牟婁郡三輪崎村」現在の和歌山県新宮市三輪崎附近（グーグル・マップ・データ）。「丑の方十七町」は北北東一キロ八百五十四メートル。

「三所洗岩」は読みも位置も不詳だが、現行、「洗岩」（あらいいわ）というのは、干潮時の水面直下に現れる（「洗われる」というのがより正しいか）岩礁を言い、国土地理院図でその辺りを探すと、ここに如何にも怪しげな複雑した岩礁性入り江があり、これをグーグル・マップ・データ航空写真で見ると、いや、これじゃないかい？ と言いたくなるもので、しかもその西北直近には「御手洗の念仏碑」というのである（江戸時代に建てられた碑で熊野古道の休息場所らしい）。実は「三所洗」で「みたらひ」と読ませるのではなからうか？」